
ネギまでクロニクル！～いざいけ！平穩なる世界！～

ころに～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまでクロニクル！〜いざいけ！平穏なる世界！〜

【Nコード】

N9696Y

【作者名】

ころこ

【あらすじ】

神様方の温情によりテンプレ通りの転生を果たした転生者Aが、ネギまの世界を出来るだけ平和にしようと仲間と共に世界を駆け回る！そんな感じの話です！なお、この作品にはTS等の要素が含まれております。閲覧の際にはそれらにお気を付け下さいませ。

第1話 新たなる旅立ち！神様は魚介類！？

Side:???

視界を白が染め上げる。

どこまでも突き抜ける白。

まるで底の無い白色の奈落へ落ちていくようだ。

落ちているのか、浮いているのか解らない。

上下、左右の感覚も無い。

己が今何処を向いているのかも理解出来ない。

そんな空間に”私”の意識は浮いていた。

「で、転生して貰うぞい」

「展開はええな、お魚さん!？」

鯛が泳いでいた。

目の前に鯛が居たのだ。

そりゃあもう赤い鯛が居たのだ。

祝い事の席ならば皆が拍手喝采するであろう程の見事な赤。

それほどの色に引き締まった身を染めた、鯛が居たのだ。

「刺身……!」

「調理方法考え始めた!？」

「いや、ワイルドに焼き魚も良い!」

「やめたげてよお!」

鯛は白い空間でピチピチと跳ねながら叫んだ。

はて、と首を傾げる。

今更だが、鯛とは喋る生物だっただろうか。

答えは否だ。

つまり目の前の鯛は、鯛ではないのだ。
そう。言うなれば、

「刺身 or 焼き魚用宇宙人……！」

「調理するところから放れないかね!？」

とまあ、冗談はさておき。

「テンプレですね、解ります!」

「身も蓋もないのう!？」

カツと目を見開いて叫ぶと鯛も絶叫。

ノリの良い鯛様である。

成程。大体の経緯は理解出来た。

「貴方が神か」

「儂が神です」

やっぱり鯛は神様だった。

すごいなーかっこいいなーとか言っていると鯛様が仰け反った。
胸を張っているつもりらしい。

「それで、何時の間に私は死んだのでしょうか」

「いやついさっきテクノ」

「()。()。アーアーきこえない」

「……冗談じゃよ?」

冗談だったらしい。

流石神様だ。ユーモアに富んでいる。

「そんな事より転生じゃ！」

「オーケイ神様、成仏したいんだが駄目かい!?」

「ええ!?いきなり投げ出した!?」

「諦めたらそこで成仏だよ……!?」

「なに悟った顔で逝こうとしてるの安西先生!?消滅しちゃらめえええええええ!!!」

鯛様の尻尾でぺちぺち叩かれた。

くそっ、あまりの愛らしさに成仏を忘れてしまつとは、

「不覚……」

「ぜえ、ぜえ……は、話聞こうか、君い!?」

仕方ない。鯛様もどうやら必死の様だし、話を聞こうじゃないか。というわけで、自分が今どの様な体勢なのかも解らないが、胸を張ってみる。

気分はソファアに座って寛ぐマフィアの首領である。

「なんか偉そうな態度になつてる気がするぞい……魂だけじゃから体勢解らんけどな」

「気にせず先に行きましょう、鯛様」

「鯛様つて何!?儂の姿確かに鯛だけどさあ！」

「いいから説明だ！」

カツと目を見開いて某バスケット漫画のテーピング推し選手みたいな顔になりつつ吼える。

鯛様もその勢いに押されたのか、むむむと唸ってから頷きを1つ。

「君にはとある世界へ転生して、これを集めて貰いたい」

「……黒い玉？」

「うむ、これはのう。儂らの力の結晶みたいなものじゃ」

「鯛様の力の結晶ですか。海産物パワー……！」

「儂、見た目鯛でも神様なんじゃがなあ……」

うーむ、と鯛様がどこから取り出した”黒い玉”を観察する。

なんとというか、”闇のオーブ”とかいう名前が付いていそつな玉だ。

オーラからして既に禍々しい。

「鯛様、まさか邪し」

「そおい！」

「ほぼお！？」

サマーソルト尻尾が華麗に炸裂。

私は宙を舞う事となった。

いや、上下感覚も無いから気がしたただけだが。

「人間には邪悪に見えるが、歴とした神様パワーじゃ」

「そーなのかー」

「これを、君には転生した世界で探してきて貰いたい」

「ほうほう。クエストみたいなものですか。……報酬は？」

「集めまくと生き返る事が出来る」

「な、なんだつてエ」

「ッ！？」

某MMRの様な陰影の濃い顔で叫ぶ。

魂だけなのそんな気がするだけだが。

「ふふふ、まあ、”君が死ななかつた場合”の世界へ意識を飛ばすだけじゃがな」

流石に死んだ事を無かった事にするのは無理じゃ、と言う鯛様。

「しかし、転生ってそんな凄いチャンスまであったんですか」

「いやあ、君達のような若い身空で死んだものだけじゃぞ？」

あと性格破綻者とかもお断りしておる、とは鯛様談。

実際そんなが送り込まれたら”黒い玉”集めどころじゃないだろう。

「つまり私は選ばれし者……！」

「殆どの若い身空で死んだ連中に各神様が聞いておるがの……！」

「Oh……」

当選確率100%という事実には白目になるが、鯛様は特に気にせず続け、

「で、”黒い玉”が多いのは、この辺の創作世界じゃな」

鯛様が尻尾を振ると、私の正面に1枚のウィンドウが開いた。

選択可能な世界

- ・魔法先生ネギま！
- ・魔法少女リリカルなのは
- ・とある魔術の禁書目録
- ・TYPE-MOON系

「見事に魔法系ですな！」

「魔法系の世界は微妙に構築時にエネルギー食うしもの」

「というかアニメとかになってるヤツばっかですね」

「お主が原作を知ってるのを選んだんじゃ。良い心遣いであろう?」
「なんで知ってるんですか」
「覗いたんじゃ」
「先生！プライバシーの侵害です！」
「この世界では儂がルールじゃ」
「くそっ、なんてこった！神も仏も居やしねえ！」
「儂が神です」
「お前だったのか……」

阿呆なやり取りをしている間にも、次々とウィンドウが展開されていく。

内容は各世界の説明や、転生者の数。

他にはステータス面について、以下の様な説明があった。

特殊能力の付与

・転生者のお決まりで、特殊能力を貰う事が出来る。世界を消し飛ばせる様なのは駄目。

成長率の選択

・成長率『高』：大器晩成。鍛えれば鍛える程強くなれる。でも最初は弱い。
・成長率『中』：転生直後からそこそこの強さ。でも成長限界が決まっている。
・成長率『低』：最初から最強レベル。だけど鍛えても殆ど強くない。

強いというのは、ただ体が強いのではなく頭の良さ等も表しているらしい。

なんだかRPG用のキャラクターを作成している様な気分である。ふうむ、成長率については、やはり安定してそうな『高』か『低』

を選ぶべきか。

「じゃあ、まずは世界は何処にするかの？」

「ネギまで！」

「即決!？」

「後の候補だったリリカルは世界広過ぎだし！」

「他の2つは？」

「また死にたくないでゴザル！」

”ネギま世界”、”リリカル世界”は厄介ごとに関わらない限り、そこそこ安全な世界だ。

だが、”とある魔術世界”と”型月世界”は違う。

戦争が起きたり、実験台にされたり、吸血鬼がうるついたり。

選択肢を間違えれば即デッドエンドな結末が待っている確率が高いのだ。

そんな不幸を回避出来る連中が此処に来るとも思えない。

よって、その世界達よりは安全そうな2つを選択。

更にそこから世界がそこまで広くない方を選んだ訳だ。

「死んでもそんなに損傷が酷くなければ再生させてやるがのう」

「なにその怪人っぽい不死身さ怖い」

「君は改造人間になるのじゃ……！」

「変身可!？」

「特殊能力にいかかのう」

「いらぬう！」

勝手に変なもんをつけられては堪ったものではない。

次へさっさと進むべきだろう。

「次は成長率じゃ」

「『中』で」
「えっ」
「『中』でお願いします」
「えっ」
「『中』でお頼み申す」
「なん……じゃと……」

鯛様の顔に某スタイリッシュ死神漫画の如き陰影が付く。

「いや、よくよく考えたら、”黒い玉”集めるだけなら、そこなりの能力があれば……」
「ええ！？良いのか！？最初から最強！とか成長限界無しとか、男の浪漫じゃぞ！？」
「そんな事より”最初にそれなりの強さ”だ！」
「そこ！？」
「この強ささえあれば、病死なんてする事もないだろうし、幼年期は安泰！」
「なんとという安全策！？」
「しかも成長限界があるとはいえ、成長する喜びが感じられるお得感……！」
「お、得……？」

ちよつと待て、と鯛様が背びれを向ける。

宙に揺れる尻尾がなんともチャームिंगだった。

S i d e : 鯛様

予想外である。

まさか成長率『中』を選ぶ剛の者が存在するとは。

……ぶつちゃけアレ、他2つを際立たせる為の選択肢なんじゃがのう。……。

正直に言ってしまうと、殆ど細かい設定なんて行ってない。だって、選ばれた事ないんだもん。

……皆、『高』か『低』しか選ばないしのう。

どうするか、今更細かい設定なんぞ出来ないし。

ああもう適当で良いか。

この転生者も悪いヤツじゃない。

ちよつとぐらい力を与えても悪用はしないだろう。

ウィンドウを目の前に表示し、設定を開始。

完了。

この間、僅か3秒。

鯛様の豪快さが遺憾なく発揮された瞬間であった。

S i d e : ? ? ? ? 転生者A

「じゃあ次は特殊能力じゃ。何が欲しい？」

「いらぬう！」

「ええ!?!」

「転生はよ」

「ちよつと待とうかのう!？」

何故引き留めるのだ、鯛様。

「と、特殊能力じゃぞ!? 男の浪漫じゃぞ!？」

「あの世界行けば、幾らでも特殊能力手に入るよ!」

「”王の財宝”とか”バスターマシン”とかはいらぬのか？」

「なにそれ殺傷能力有り過ぎ怖い」

「た、例えじゃ、例え。で、何かないのかのう?」

「うーん、じゃあ……成長限界と最初からの強さの度合いを上昇…

…?」

「基盤強化するだけ!？」

「素の能力で圧倒、それもまた浪漫だとは思わぬかね……」

「ハッ!」

鯛様は私の言葉に驚いた様に見開き、マジで目から鱗を落とす。

鱗落として大丈夫か魚介類。

なにはともあれ、あと一押しっばいので、心の中で拳を振り上げ、

「ただ1つの肉体で圧倒! そう! まるで某龍玉の如く!」

「少年漫画の王道じゃな……! この儂が間違っておったわ……」

鯛様は解ってくれたようだ。

彼はうんうん、と頷いてから、

「じゃ、リミッター色々外しておくぞい」

「えっ」

「某龍玉みたいなら限界は超えるものじゃろうがあ!？」

成長限界はどうした鯛様。

「良いからZ戦士だ！」

カツと目を見開きながら、某バスケット漫画のテープイング以下略。
まさか”あの作品”のファンだったのだろうか、この鯛様。
とりあえずもう駄目っばいのでさせるがままにした。

「よし、リミッター解除成功じゃ」

「マジでやつちまったよ鯛様……」

「Z戦士故致し方なし……あ、あと原作じゃが別に介入しても構わんからな？」

「ん？」

思わず首を傾げてしまう。

原作ブレイクなんてして、良いんだろうか。

「今からお主が行くのは”ネギま！”という作品を元に構成された世界じゃ。想像の数だけその世界の数は存在しているからの。別に原作から外れても問題ないわい」

「そっぴや世界構築とか……実は凄い神様だったり？」

「妄想の世界具現化は格の低い神様の簡単なお仕事です」

「ソウデスカ」

思わず揃って白目を剥く。

なんか居た堪れなくなつた今日この頃である。

「じゃあ、転生じゃな」

「あれ？まだ容姿とか決定してないですよ？」

「この鯛様が既に決定しておる！安心せよ！」

「鯛様って自分で言った！？安心出来ねえ！？せめてヒント！」

「TSって良いよね！」

「ヒントは良いから結果を言えエ　！」

「ゆっくり原作介入していつてね！」

「この鯛様、最初から原作介入させる気満々じゃねえか！？」

鯛様が愛らしく身を跳ねさせる。

捌いてやるうか。

「よし、ある程度決まったところで”いつてらっしゃい”じゃな
「え」

瞬間、穴が空いた。

真下の空間、と思われる場所に黒の色が出現したのだ。

その現れ方は唐突で、この身にかかる重力が顕現するのもまた唐突であった。

そして私は落下した。

「サポートセンターは年中無休でくっついてるぞい！安心して頑張るんじゃぞー！」

「サポートセンター！？」

絶叫にも近いツッコミを最後に私の意識は、黒の一色に染め上げられた。

第1話 新たなる旅立ち！神様は魚介類！？（後書き）

初投稿ですが、よろしければどうぞよろしくお願い致します。

まずは、お決まりの空間より落下系主人公で開幕であります。

第2話 いざ新天地！生誕の地よサラバ！

Side：転生者A

白の空間から一転、闇が世界を支配した。
広がる黒。

今度は沈んで行く感覚が身を包むのが、ハッキリと解る。
まるで深海へ沈み込んで行く様な重み。

だが、それは肉体が持つ重量だ。

その感覚が意識が認識した時、理解した。

肉体が、与えられた。

掌を握る感覚が神経を走り、脳へと伝わる。

暗闇の中から、意識が、浮上する。

目覚めは一瞬だった。

「……！」

ごぼり、と口から気泡が漏れる。

何事と思う事も間もなく、状況は理解出来た。

液体の中にいるのだ。

目を見開き、周囲を見渡す。

薄い緑色の液体が全身を覆っている。

視界も同色に染まっていた。

不可思議な事態。

だが、意識は鮮明だ。

これが転生効果というヤツだろうか。

恐慌状態に陥る事もなく、此処がカプセルの様な物の中だと把握
出来た。

「……」

成程、と頷きを1つ。
実験動物系の開始か、これは。
顔を上げると、潰れた女性の顔が見えた。
ついでに視線が合った。

……うわぁ。

なんか超目を輝かせた女性がこつちを見てる。
のぞき窓と思わしき所に彼女は顔を張り付かせていた。
元はかなり整っているであろう顔も無残に今は押し潰されている。
というか、目を血走らせてるし、鼻息荒くて窓白くなってるし。
こつち見んな。

……む、裸か!?

今更だが、自分が何も身に纏っていない事に気づいた。
視線を下ろせば広がるのは大草原。
Oh…なんとというロリボディ。
身長も、大体の感覚でしかないが1mに届いていないんじゃないかな。
ろっか。

完全に子どもである。

「あ、う」

声を出そうとしてみるが、ちゃんと発音出来ない。
ううむ、液体に浸ってるせいだろうか。
というかのぞき窓に張り付いた女性が怖い。
こつちが動く度に恍惚とした顔を浮かべるな。

涎を垂らすな。手をワキワキさせるな。
そんな事やっていると泣くぞ。すぐ泣くぞ。全力で泣くぞ。
マジ怖いですからのぞき窓に頬擦りしないで下さい。

「……」

うへへ、と声が聞こえてきそうな女性の様子を見つつ、今後の展開を予想する。

判断材料は、危険信号の塊っぽい前方の女性。
相変わらず金の短髪を揺らしながら、のぞき窓に頬ずりしてる。
なんか煙出てるけど大丈夫なんだろうか。

……まあ、ネギま世界の住人だし大丈夫だろう。

多分ギャグ要員だろうし。

……現状は、恐らく研究員が実験動物が目覚めたのを見つけたって
トコロか。

しかし、実験動物が目覚めただけにしては、女性の奇妙過ぎる様
子が気になる。

私、実は結構重要な研究対象なんだろうか。

……とりあえず。

重要なのは、今の状況から脱出出来るか、否か。

『出来るぞい？』
「む」

鯛様の声？

『此処じゃよ、此処』

「何故、肩に……」

右肩に視線を向けると、半透明になった鯛様が張り付いていた。彼は右の胸鱗をヨツ、とでも言う様に上げる。

『サポートも神様の仕事じゃて。まあ、僕は分身みたいなもんじゃが』

おお、そこまでしてくれるのか。

神様って親切だなあ。

罵倒していたのがちよつと悪くなる。

「だがロリボディに、転生させたのは許されざるよ」

『ナイスチヨイスじゃろ？』

キラツ と擬音が付きそうなウィンクを放つ鯛様。

やべえ殴りてえ。

『何はともあれ、脱出したいなら、前方の扉を殴ってみるが良いぞ』

『？』

「ん？」

ふむり。鯛様はどうやら脱出の手引きをしてくれるつもりらしい。

「状況の説明は、してくれない？」

『僕もお主から離れられんし、起きたばかりで現状を理解はしとらんよ』

成程。別段良い方向へ導いてくれるという訳ではないらしい。
やりたい事を成す方法を教えてくれるだけという事か。

……とりあえず……。

のぞき窓が付いている部分へ視線を向ける。

その周りを見てみると、若干の窪みが枠を作っていた。

どうやらのぞき窓が付いている部分が、このカプセルの扉らしい。
なれば、鯛様の言う通り、

……殴る！

拳を引いてから、若干液体の中で体を捻り、回す様にして、

「疾ッ！」

放つ。

S i d e : 研究員 A

瞬間、偉大なるプロジェクトに参加する研究員 A プリオラは
狂喜していた。

何故かと言えば、その原因は目の前にある。

真白いカプセルに備え付けられたのぞき窓。

その中で、満たされた液体に浮かぶ様になっていた少女が、動いた。

”研究対象”兼”保護対象”である少女が”目覚めた”のだ。

計器の前で徐々に小さくなっていく心拍数を見た時、今回も駄目かと思った。

今までの努力は全て無駄だったのかと落胆した。だが、心拍数が0になった瞬間の事だ。

『

計器の電源が落ちた。

魔力によってサポートもしていた筈のそれが、唐突に反応を無くしたのだ。

正直こちらの心臓が止まったかと思った。

生命維持装置まで電源が落ちていたら、という考えが脳裏を過ぎったからだ。

慌ててカプセルまで走り、のぞき窓の中へ視線を移し、

「……」

『……』

こちらを見ている幼い少女と目があつた。

橙色の長髪を液体の中に泳がせる少女の視線は凛々しく、ハッキリとしていた。

間違いない。

生きてる。

「~~~~っ！」

感動の余り、声を上げてしまった。

何事かと周りの研究員が視線を集めてくる。

だが、気にはならない。

「やった……！やったのよ……！」

もう嬉し過ぎてのぞき窓越しに頬擦りしてしまう程だ。

ああもう目覚めたなら目覚めたと言ってくれば良いのに。

人を心臓止まらせる程驚かせてから、幸せプレゼントとか御茶目さん！

うへへ、と涎が流れるがスルー。

早く外に出してあげたい。

そしてこの手で抱きしめて、直に頬擦りだ。

そりゃあもう実の娘の様に可愛がってあげるんだから！

「でもその前に各種チェックね！ああでも離れたくない！」

カプセルにこのまま張り付いて一晩を過ごしたい気分だ。

徹夜続きのせいで寝不足だが、それすら苦にならない。

よし決めた！今日はこのまま一晩中一緒に居てあげ、

「ん？」

何かカプセル内で動きがあった。

少女が体を捻っていたからだ。

運動がしたいのだろうか。

……ふふふ、安心しなさい！ここから出たらいっぱい運動させて。

そんな風に未来設計が脳裏を過ぎった瞬間だった。

のぞき窓内で、少女の姿がブレた。

「およ?」

愛しの少女の姿が遠ざかっていく。

何故か。

簡単だ。

のぞき窓の付いている扉が吹っ飛んだのだ。

ついでにその扉に張り付いてた自分も吹っ飛んだのだ。

実に解りやすい。

しかし、

……ああ、拳を突き出す姿もとってもプリティよ!

次の瞬間、ぶぎゅっと声を上げてしまった。

唐突な衝撃が脳を揺さぶる。

勢い良く壁に叩きつけられた彼女は、しかし、最後の根性で、

……ナイス正拳突き!

親指を立てたジェスチャー。

ありつたけの賞賛を少女へ送りつつ、壁と扉に挟まれたまま気を失った。

Side: 転生者 A

目の前で、べちゃっと音を立てて女性が床に落ちる。

なんか幸せな表情で落ちたし、多分大丈夫だろう。

「……凄いパワー」

『じゃろ？成長率』『中』は伊達じゃないぞい』

右肩の上で、嬉しそうに語る鯛様。

ていうか、本当に『中』なんだろうか。

なんか凄い勢いでカプセル破壊されたんだが。

『高』だったら今のでカプセルなんぞ跡形も残らんわい』

「なにそれ怖い」

『中』を選んで、本当に良かったと思う。

さて、と液体の流れた出たカプセルから外へ足を踏み出す。

液体が無くなった分、余計に身体が重く感じる。

だが同時にそれは、生きてる感覚も与えてくれた。

……ああ、生き返ったあ。

んーっと体を伸ばしてから、首を左右へ傾ける。

骨が鳴る快音。

続けて周囲を見渡せば、啞然とする白衣を着込んだ女性が数人。

「……」

『……戦闘員では、無いようじゃのう』

視線を向けると、肩を跳ね上げる女性達。

表情から見るに、怯えているのだろう。

「ん」

一息。

ただそれだけの行為。

だというのに、女性達は部屋の隅まで猛ダツシユで避難した。え、何その怪獣から逃げる様な全速力。

「……………」

『フハハハ！怯えろお！竦めえ！研究成果を活かせぬまま死んでゆけえ！』

しかしこの鯛様ノリノリである。

とりあえず鯛様の腹を叩いて、

「説明はよ」

『お？説明？』

「現状を、把握したい」

『なんかお主口調が平淡になってるような気がするんじゃが……………』

なんか話すのが難しいのだ、このボディ。

顔が硬いというか、なんというか。

『まあええわい。まあ、正直儂にも解らん。儂、お主の容姿を設定しただけじゃし』

「容姿……………」

『うむ。そこの鏡を見てみるが良いぞい』

鯛様が指差す先には、全身を映すタイプの鏡が1枚設置されていた。壁に掛けられたその鏡には、1人の少女が映っている。

まあ、私の事だ。

少女なのは諦めた。

鯛様が勝手に選んじやったし。

生き返れたのには変わりないんだから、許容範囲である。

問題は、

「アス、ナ……」

チビ明日菜だ。

完全にチビ明日菜である。

原作でもチヨコチヨコ出ていた我らがヒロイン明日菜の幼年期である。

しかも昔の無表情モード。

試しに笑ってみようとしたが、表情筋が死んでいるかの様に動いてくれなかった。

まさに鉄壁フェイスである。

……Oh……。

なんとという鯛様でしょう。

原作キャラの中でも超重要キャラ似ボディにしてくれるとは。

これには匠 もとい、私も内心苦笑い。

というか研究対象にされてたとか、正直嫌な予感しかしない。

『ううむ。明日菜似と設定したは良いが、こんな状況になるとは』

もう少し細かな設定しておくべきじゃったのう、と鯛様は顎を齧でなぞる。

「……」

『むねむ』

とりあえず、現状の理不尽さに涙が出そうだったので鯛様の頬を突いておいた。

人差し指でプニリとすると、ちよつと落ち着いた。

1 突きでこれとは、なんという癒し効果であろうか。

流石の鯛様である。

……とりあえず、今必要なのは。

決まっている。

周囲は女性ばかりとは言え、何時までも裸体を曝してる訳にもい
くまい。

現在は同性とは言えだ。

ええ、予想外ではあるが、同性とは言えだ。

つまり、今必要なのは、

「服

「は、はいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

「？」

研究員の1人と思われる女性が奇声を上げながら全速力で扉から
出て行った。

何が起きたのかは解らないが、まあ、そういう年頃なのだろう。

名も知らぬ研究員さんよ、頑張れ。

その様な意思を乗せた慈愛の視線を研究員の走り去った扉へ向け
ていると、

「？」

不意に肩に布の感触が降りてきた。

振り向いてみれば、肩程まで緑色の髪を伸ばした女性が居た。その姿は灰色のスーツで、白衣は着ていない。

「え、えっと、寒いでしょう?」

女性は、こちらの肩に自らの白衣をかけてくれたのだ。

彼女は強張った表情を浮かべつつも、こちらを心配してくれている様子であった。

……なんと。

優しい女性だ。

私が男のままであったならば即座に惚れ込んでいただろう。現在は同性なのが悔やまれる。

「……ありがとう」

「えっ!? あ、は、はい……」

白衣で身を包み、再度周囲を見渡す。

様々な機器が部屋に所狭しと配置されている。

そして、部屋の最奥には先程破壊してしまった白いカプセル。所々から煙を上げ、液体を噴き出している。

部屋の広さは、一辺が7 m以上はあると思われる正方形。

高さは4 m程か。

部屋の中に存在する研究員と思わしき女性は4人。

1人は緑色の髪を肩まで伸ばしたスーツ姿の優しき女性。

もう2人は部屋の隅でガタガタ震えている。

金髪のデコ見せヘアと前髪で目を隠した黒髪の2人組だ。

ちなみに2人も灰色のスーツに白衣といった出で立ちをしていた。

緑髪の女性もそうだし、此処の制服だったりするのだろうか。
ちなみに最後の1人は扉の下敷きになっている金髪だ。

「あの人」

「え？ああ、か、彼女？多分、大丈夫だと思うけど……一応亜人だし」

亜人？

という事は此処は魔法世界か。

良く見てみれば、緑髪の女性も額に1対の白い角が生えている。

「……」

「ええっと、何か私の顔に付いてるかしら？」

「何も」

困った様に口元に手を当てつつ、女性はこちらを見てくる。

ぶっきらぼうな口調になってしまつのはなんとかならないだろうか、マイボディ。

『クールな女子って良いもんじゃよね！』

「神様エ……」

「？」

右肩でピチピチ跳ねる鯛様はスルー！。

とりあえず女性に頭を下げて、白衣のボタンを留め、回れ右。

視線の先で目を回している金髪を救う為に歩き出した。

Side：緑髪の亜人研究員

何時もは静かで退屈な研究室。
その変化は本当に唐突だった。

「へ？」

私はその瞬間、間抜けな顔をしていたと思う。

目の前で、ちよつと特殊な趣味を持つ女性が宙を舞っていたのだ。
しかも、頑丈さが売りであった筈のカプセルの扉と共に。

……あつれー？あれって”ラカンが殴っても大丈夫！”っていうのが売り文句じゃ……。

視線を件のカプセルへと向ける。

水音を響く。

音は、幼い少女の歩みによって発生しているものだった。

濡れて重くなった橙色の長髪を揺らしながら、彼女は足を進める。
カプセルから軽い動きで出て来た彼女は周囲を少し見回すと、

「ん……」

自分の頭上で手を組み、全身ごと天に向かって伸ばし始めた。
更に身体の調子を確かめるかの様に各部を肩を回し、手を開閉する。

そつする事、数分。

研究室に静寂が訪れる。

怖い。

目覚める筈がない欠陥品。

それが、彼女の呼び名だ。

私達は暇だから、特にやる事もない部署に飛ばされただけだった筈。

書類の山から解放された、平和で優雅な日々が送れる筈だったのだ。

だが、その”筈”はいとも簡単に打ち砕かれた。

欠陥品と呼ばれた少女は今、目を覚まして、目の前に存在している。

その能力は一国を滅ぼしうるといふ伝説の力を秘めた少女が、だ。

「
」

不意に少女の視線が、こちらに向いた。

「ひっ」

「ひいひいひい！」

「ちよっ、おまっ！」

最初の私の怯えを切っ掛けに、他の研究員が全力で壁際までダッシュしていった。

おのれ、私を置いていくとは後で酷いぞ貴様ら。

約1名逃げ遅れが居たが、彼女も近くの壁に張り付いて、移動を開始。

どうやら恐怖の権化である少女の後ろを通って扉まで辿り着くつもりらしい。

「アス、ナ……」

「!?!」

この子、オリジナルの名前を!?!

まさかオリジナルの記憶まで持っているというのか。
となると色々過去に酷い目にあっていたという話だし、

……生き残れる気がしない!?

今までの恨み!とばかりに虐殺される未来が脳裏を過ぎる。
すいません、母様、父様、娘は親孝行があまり出来ない娘でした。
ほろり、と頬を一筋の涙が伝う。

歪んだ視界の端では、隙について脱出を試みた同僚が少女に服を
要求されていた。

背を向けている筈なのになんで気づけるんだ、あの幼女。
殺気に思わず涙目になりながら、扉を乱暴に開けて全速で退出す
る同僚。

というか、あの幼女マジで怖い。
目が完全に殺し屋のそれである。

幼いながらも鋭い目つき、一切変化のない表情。
その上で滲み出るあの威圧感。

「……」
「ハッ!?!」

威圧感が薄らいだ、と思えば少女の視線の向く方向は、研究所の
出口。

同僚が今さつき服を探しに飛び出した、ある意味楽園への入り口
だ。

……まずい!数秒しか経っていないのに怒ってらっしやる!?

このままでは八つ当たりで殺られる!?
そう思うと行動は速かった。

そう。逃げれないなら、立ち向かうのみ。
怯えに震える足をなんとか動かしながら、1歩、2歩。
なんとか少女へと近づく。
そして、己の白衣を脱ぎ、彼女にかける。

「？」

少女の意識が向けられる。

氷に様に冷たい視線。

思わず目を背けたくなるが、全力でその欲求を抑え、微笑む。
ぎこちなくなっただが、お願いだから看破しないで下さい。

「……ありがとう」

「えっ!？」

思わぬお礼に目が点になる。

え、もしかしてこの子、意外に、普通の子？

外はクールで中身はほっこりって感じなの？

「あ、は、はい……」

だが油断は禁物だ。

迂闊に砕けた態度をとったらカプセルを破壊した攻撃が飛んできかねない。

ここは慎重に、礼を失さない様に頷く。

声が強張るのは仕方ないだろう。

だって怖いんだもの。

「あの人」

「え? ああ、か、彼女? 多分、大丈夫だと思うけど……一応亜人だ

し」

カプセルの扉に押し潰された金髪を見る。

時折頭に生えた角が動いてるし、大丈夫だろう。

亜人という種族は総じて頑丈なのだ。

私も幼い頃からこの頑丈な身体には何度も助けられたものだ。

……うおっ、殺気!?

寒気を感じて少女に視線を戻すと、彼女はこちらをジッと見ていた。

あ、死んだ?なんか知らない内にバッドエンドフラグ立てちゃった?

「ええっと、何か私の顔に付いてるかしら?」

「何も」

何でもないならその殺気を向けるのを止めて!

「神様……」

「え?」

ぼつりと呟くと彼女は背を向けて、倒れ伏す金髪へと向かっていった。

なんか片手でとんでもなく重い筈の扉をぶん投げたりしてたが、気にしたら負けだ。

しかし、今の呟きは一体。

神様、という単語が、何を意味しているのか。

……どういう事なの。もしか、神様への恨み言……!?

神様は、なんでこんな世界に私を生まれ落ちさせたの？

死ぬ方がマシなくらい辛い思いをするなら生まれられない方が良かった！

こんなにも苦しいなら、こんなにも悲しいなら……世界などいらぬう！

ズビズバギャー。

……スプラッター……！

脳裏では血塗れの少女が狂気に満ちた高笑いを上げつつ、自分を虐殺中である。

……絶対に彼女の機嫌を損ねてはいけない！

私は心の中で強く決意するのであった。

Side：転生者 A

数時間後。

何故か私は研究室らしき場所とは別室に居た。

「わぁ、服似合ってるわよー」

「ん」

そして着せ替え人形にされていた。

目の前に居るのは金の短髪をいやんいやんと揺らす女性
オリ

先程、吹っ飛ばしてしまつた彼女を助けたのだが、

……まさか自己紹介された上、お詫びに服を用意する、とか言われるとは。

ちなみに叫んで部屋を飛び出して行つた研究員はスク水を持つてきた。

即座に近くにあつたランプで焼却しておいたが。

『似合つてるのう。というか恥じらつたりせんのか？』

十分恥ずかしいツスよ、鯛様。

ただどうあがいても表情にそれが出ないだけだ。

何この鉄皮面。

ていうか、鯛様他の人には見えてないんスね。

さつき皆の反応を見て漸く気づきましたよ。

……しかし、あんまり”女”になつたつていう実感がないなあ。

元々それが自然であつたかの様な感覚。

なれば、現状を受け入れる事も簡単だ。

……うーむ。確かに”私”は男だつた筈なんだが。

記憶を探ってみれば、確かに過去の己は男だつた。

常にマツシブなボディを目指して肉体を苛め抜く日々を送る益荒男。

そんなナイスガイが、過去の己。

今やその片鱗すら消し飛んだボディではあるが。

……む。新しい服か。

プリオラがハンガーラックから新しい服を取り出し始める。勿論、満面の笑みを浮かべながら。

というか、この部屋、なんか凄い少女趣味な服多くないか？しかも全部私のロリボディにピッタリなサイズである。明らかに元々用意してあっただろ、コレ。

「やっぱりスカートが似合うわね！うん！」

彼女は白衣の裾を派手に揺らしながら、頬に両手を当ててくねくね。

恍惚とした表情が怖い。

……なんで着るのも自然に出来るんだ？

着せられたプリーツスカートの裾を持ちながらヒラヒラと振ってみる。

落ち着かない気分ではあるが、特に嫌という訳でもない。

『むう、肉体への最適化が過剰に行われておるのかもしれない』

鯛様が不穏な事言いながら、首を傾げる様に身体を捻った。

なんとという可愛らしい動作か。

「後はこの上着を着れば完成ね」

ふとプリオラの声に振り向けば、彼女の手にあるのは民族衣装っぽいもの。

それは、地面まで届きそうな長い裾を持つ、ワンピースの様な服

だった。

ただし、スカート部分は前の方が大きくカットされており、足が見えている。

胸元から二の腕辺りまで模様が入っており、それがアクセントとなっていた。

……って、それ、チビアスナが捕まっていた時に着てた服じゃ。

下にプリーツスカートを履いているという差異はあるが、大体同じだ。

「ふふふー、大戦期の極秘資料を見て、写真の服に合わせて用意したのよ！」

貴女には何の事だか解らないでしょうけどー、と彼女は苦笑する。いや、解りますけど。

というか大戦期の極秘資料を見てって、実は相当偉い人なのか、この人。

「さあー、ドンドン着せちゃいましょうねー」

「……任せる」

「任されたわ！」

輝く瞳が標的（私）をロックオン。

まあ、折角選んでくれてるのだし、悪い気はしない。ヒヤッハー！と上着を私に着せていくプリオラ。

そういえば他の研究員は何処に行ったのだろうか。

『記憶を持つてるとか、上に報告とか何とか言ってどっか行きおったぞい？』

「……」

上司に研究対象が目覚めた事を報告、という事だろうか。
だとすると、早めに脱出した方が良いな。

……プリオラさんには悪いけど、実験動物はマジ勘弁だからな！

服とか色々貰っておいて、薄情だとは思うが命には代えられぬの
だ。

誰に言われなくてもスタコラサツサだぜ！

「あとはー。あ、ツインテールね！念願のツインテールが出来るわ
！」

響きのに殺してでも奪い取られそうなツインテールだな。
しかし、嬉しそうに髪を弄るなあ。

「……ねえ」

「ん？なあに？というか、そっちから話しかけてくれたの始めてね
！？嬉しいわ！」

「なんで……私に良くしてくれるの？」
「なんでって……」

んーそうねえ、と彼女は困り顔で頬を掻く。

「私、貴女が起きるのをずっと待ってたのよ」
「起きるのを？」

「うん。もう2年くらいになるかしらねえ」
「長い」

「そう。随分長い間待ったわあ……」

プリオラは、溜息を1つ。

「でも今はこうしてお話出来てるし、待った甲斐はあったというもののね!」

「……」

やばい。この人凄く良い人なんじゃ。

ほら、もしかして私の勘違いで、この人達は私を保護してくれてただけ、

「でも暫くしたら、貴方も本国に行かなきゃいけないだろうし……」

淋しいなあ、とはプリオラ談。

それを聞いて、内心は凄く良い笑顔で頷きを1つ。

「うん」

よし、パパン張り切って脱出しちゃうぞー。

本国送りとか嫌な予感しかない。

某アルター使いが『ハンマー!』しか喋れなくなるくらい嫌な予感しかない。

そうと決まればやる事は1つ。

……鯛様、この辺りの地図とか、今年年とか解る?

『む?そのくらいなら本体から情報をダウンロード出来る筈じゃぞい?』

本体って何?あの白い空間の鯛様なの?いっぱいいるの?養殖なの?

それはともかく、ならば問題無し。
逃走資金と逃亡先の確保は、

……魔法世界なら狩りとかで生活分は確保出来るよね、うん！

楽観的な思考でスルーする事にした。

あんまり考えてるとドツボにはまると思ったからだ。
人生、要所要所では気楽に行くのが一番だよね！
強化された身体もあるし、何とかなるさ！

「よーっし、ツインテール完成よ！」

「……ありがとう」

本当に嬉しそうな声。

罪悪感が胸を刺す。

でも悲しいけど、これって実験動物生活から逃亡する為なのよね。

「ねえ」

「ん？なあに？」

「外、出たい」

「あら。もう？でも色々検査が……」

「お願い」

「……ちよつとだけよ？」

ツインテールを翻し、振り向きからの上目遣いコンボ。

こっちはばつぐんだ。

相変わらず無表情だけ。

『元男なのに上目遣いを使いこなすとか、恐ろしい子……！』

白目剥いた鯛様は無視した。

一発でノックダウンされたらしいプリオラに手を引かれて廊下に出る。

そのまま数分歩いて、外へ。

「さあ、ついたわよ。ここがお外。貴方は……初めてよね？」

「……」

凄い。

初めに抱いた感想が、それだった。

チープな言葉でしか表せないが、とにかく、凄い。

白亜の研究所らしきものを背に、私達は広い庭に居た。

庭と言っても仕切りなどがある訳でもない。

その代りに、

「その森、危険な動物は住んでないけど、1人じゃ行っちゃ駄目よ？」

庭を区切る様に、森が広がっていた。

高く背を伸ばした木々が構成する森だ。

草原の様な庭と、森の見事に組み合わせられた風景。

綺麗だった。

自分の居た国では、滅多に見られない光景だ。

同時に、それらは此処が別世界なのだという事を視覚的に教えてくれた。

天然のそれらは、人工的な物を見慣れていたこの胸を震わせてくれる。

……って、そんな事してる場合じゃないよな。

強化された目を凝らすが、奥が見えない。
結構深い森らしい。

……行ける？

『ふむ。危険な獣も居ない様じゃし 行けると思うぞい』

ならばよし。

「でも遊び道具がないわねー……何か取り寄せようかし」

「プリオラ、さん」

「ん、今、名前で……？えっと、なあ」

「ごめんね」

彼女が『なあに？』と言い終える前に全力ダッシュ開始。

「え」

呆然とした声が背後から響いた。

最初は殴ったりして気絶させようかと思ったが、

……下手に殴って潰れたトマトにしてしまったら嫌だし！

この肉体、スペックがとんでもない。

さっきもプリオラに隠れて鉄製のパイプを握ったら、

……見事に握り潰せたしな。

武術の心得もそんなにない自分では上手く気絶させられるのかも
解らないし。

……三十六計逃げるに如かず　　ッ！

『それでいいのか主人公』

主人公じゃねーし！

私には脇役がお似合いだし！

というわけで、プリオラ殿、サラバダー！

「　　!?」

後ろから叫び声が聞こえてきて若干胸がチクリとするが、今更止まれない。

そのまま私は森に飛び込み、走る。

振り返る事は、無かった。

第2話 いざ新天地！生誕の地よサラバ！（後書き）

生誕の地（約数十分）。

感想などがありましたら、ぜひよろしくお願い致します！

以下、主人公設定図

> i 3 6 0 6 0 — 4 5 1 4 <

物理殴打系ヒロイン兼主人公

ッ！

第3話 指針決定！そして新たな力！？

Side：転生者A

「まさかの爆弾……」

『だが散弾ではなあ！』

全身からシユウウと煙が上がる。

強化ロリボディでなければ即死だった。

……走つてたらいきなり足元が爆発するとかもうね。

魔法世界なのに地雷つばいのとかどうなんだ。

しかも散弾式とか殺す気満々ですぞ。

なんか弾が光ってたからもしかしたら魔法なのかもしれないが。

『しかしまだ数時間も経っていないのに、気の使い方が上手いのう』
「咄嗟に、鯛様助けてくれた」

鯛様が言った通り、全身に膜を張るイメージを浮かべなければ、

……今頃ミンチより酷えや状態になってたよ！

見れば、自身の身体を薄く金の光が覆っている。

これは、念とかそういうのだろうか。

先程の攻撃を防ぎ切ったのも、この金の光だ。

服にすら傷一つない。

凄いの使える様になっちゃったな、自分。

……数時間前まで普通の生活してた筈なんだけどなあ。

まさかこんな不思議パワーが使用可になるとは。
現実離れした事実を確認すると同時に、自分が1度は死んだ事を
思い出す。

「痛ッ」

一瞬、脳裏にチリリと火花が散る。

……何だ？

頭を振ると頭痛は消えた。

いや、それより今は目の前の光だ。

輪郭に身を包むそれは動けばキチンとついてくる。

軌跡に残像を残しているのが、地味に感動だ。

1回くらいなら転生もしてみるもんである。

ちゃんと仕事すれば、生き返れるらしいし。

もしかして凄く貴重な体験をしているのではなかるうか!?

……まあ、死んだからだけだな！

発生条件がリスクー過ぎるのが玉に瑕である。

と、そんな事を考えている場合ではなかった。

体勢を立て直さねば。

「んっ」

防御は鉄壁でも、中身は素人なのだ。

閃光に驚いて思わず転んでしまっても仕方ないだろう。

というわけで、立ち上がり、手を2、3回開閉する。

「うん……問題ない」

『ああもあっさり防御するとは思わなかったが、やるもんじゃのう』
「鯛様の、おかげ」

鯛様の言葉に感謝の言葉と頷きを返して、再び走り始める。
否。

その動きは走るといふよりも、跳ぶといった表現が正しいか。
さっきのような爆弾を警戒して、木の枝と枝をジャンプして渡る
事にしたのだ。

枝と言っても、太い。

どれくらい太いかと言うと、現在の自分の胴回りよりも太い。
ちみっこい自分が乗ったところで、折れる心配はないだろう。

……前までだったら絶対やろうとも思わなかったよな！。

つくづく人間離れしたもんである。

『このまま真っ直ぐ木の枝を今のペースで渡り続ければ、数十分で
森を抜かれるぞい』

「ん。頑張る」

言葉と共に、跳ぶ。

顔を撫でつける風が結構気持ちよかった。

森を脱出し、1日が経った。

朝である。

え？展開が早いって？細けえ事は良いんだよ！

さて、朝までの間、私が何をやっていたかというと、

『あのキノコは食えるのう』

「いただく」

茸採り等、アウトドア生活を楽しんでおりました。

『まあ、行く宛が無いとも言っつがの！』

「気にしない」

此処は研究所らしき場所を覆っていたかなり広大な森を抜け出してから、道なき道を更に数時間走った場所にある溪谷だ。

命からがら罨だらけの森を突破してきた先にこのような場所があったのだ。

左右を見れば頂点が白い雲に覆われた山々が織りなす絶景が広がっていた。

『しかしこれからどうするんじゃ？』

「……目的は決まってる」

座ったままの体勢からキノコを握って立ち上がり、

「後は、今から考える」

『結局行き当りばったりだった！？』

いや、後先考えず飛び出たし。

その結果だし、現状は自業自得だ。

まあ、鯛様が居るから淋しくないし、生活の為に必要な助言まで

してくれる。

あんまり不自由ではないのが現状だ。

『しかし、目的とは？』

肩の上で鯛様が首を傾げる様に身体を捻る。

それに対して私は頷き、

「黒い玉集め」

『うむ。当初の目的を忘れてないのは良い事じゃ』

うんうん、と鯛様も頷きを返してくれる。

それに対して、私は右手の人差し指を立てて言葉を続けた。

「あとは、ネギを、出来るだけ平和に過ごさせる、のだ」
『……………ん？』

え。何故訳が解らないよ、みたいな顔をするのですか。
原作介入しても良いよ？って言ったの貴方でしょうに。

『いや、しろとは言ったがの……………何故ネギを平和に生きさせる方向
なんじゃ？』

「……………可哀想」

だって原作時、数えて10歳ですよ、あの子。

凄まじいまでの天才なのは原作見れば解るが、

……………あの歳で世界を救う為に命賭けたり、人間を止めちゃったりと
かねえ。

自分の住んでいた国なら、楽しく友人達と遊んでいるであろう年頃だ。

だから、

「ネギが、平和に暮らす世界があっても、良い」
「……………」

何故ポカンと口を開けてるのですか、鯛様。

『めつずらしいタイプじゃのうお主……………』

「……………」

『ネギ坊主を平和に暮らさせる』のが願いなんぞ、初めて聞いたぞい？』

「そついう転生者が居ても良い……………」

自由とはそついう事だ、と心持ちハードボイルドな感じで笑みを浮かべる。

浮かべたつもりだけで、表情は全く動かなかったが。

おのれ鉄壁フェイス。

『まあ、ぶつちやけ本人に希望を聞いた訳でもない押し付けじゃが』
『の』

「ぐく」

ぐぬぬ……………そりゃ解ってるのですが。

”漫画の世界”に来たって言っても、そこで生きてる人達は本物だ。

自分がやろうとしている事は、他人の人生を好き勝手に左右する様な事なんだから、

良い事でないのは確かなのだけでも……………。

……子どもが痛い目にあうのが解ってるのに、放ってはおけないよなあ。

頬を搔いて、鯛様へどう答えたものかと脳を働かせる。
が、返す言葉を聞く前に鯛様はコチラの肩へ貼り付き、

『まー、僕は嫌いじゃないがのう。そういう考え方』
「……………」

どうやら考えを読まれていたらしい。
肯定してくれる人が居るだけでも、大分楽になる。

……うん。どうせやるなら、確り腹を括って行こう。

その途中で何があったとしても、自己責任だ。
それだけは覚悟しておこう。

『で、具体的にはどうするんじや？』

「今は、原作の何年前？」

『待て。確認する』

鯛様が空を見上げて何かと交信を開始。

あれ、もしかして本体と交信してるんだろうか。

『うむ。解ったぞい』

暫くして、鯛様がふわりと宙を一回転してコチラを向く。

『今は原作開始の6年前じや』

思わず内心で感激の声を上げる。

なんとも良いタイミングに転生してきたものだ。

だが、まだ確認しなければいけない事が残っている。

「ウエールズ、襲撃は？」

『まだの様じゃな。季節的にウエールズは今、秋の様じゃのう』

「……あまり、時間が無い」

タイミングが、ちよつと良すぎた様だ。

今からウエールズ襲撃を防ぐとかかなり無理があるんじゃないかなるか。

まず、ネギを平和に過ごさせる為には幼少期のトラウマを失くす必要がある。

でなければ、父親の影を我武者羅に追いかけるのは既に明白なのだから。

……しかし、幾らタイミングが良くつても大き過ぎる問題だな、これ

なにせよ自分の現在地が悪すぎる。

……魔法世界からじゃ、移動手段が限られてるよな。

ゲートとかゲートとかゲートとか。

主要な都市にしか無いとか、交通が不便過ぎる……。

いや、そもそも魔法世界の住人の殆どは使わないんだろうけど。

「ゲート、使える、かな？」

『無理じゃないかのう……少なくとも資金が必要じゃぞい。あと身』

分証明証もな』

「……………ない」

『ふむ。現実世界へ行く手段がない訳でもないぞい？』

「!?!?」

目を見開いて鯛様へ視線を向ける。

『フッフッフ、驚くでないわ。儂、神様じゃぞ？』

ドヤア……………とばかりに胸を張る鯛様。

良いから情報早よ下さい。

『つれないのう……………まあ良いわい。その手段とはのう』

「とは……………?」

『黒い玉のパワーを使って、無理矢理その場にゲートを開く!』

「黒い玉持ってない」

『安心せよ!』

というか、黒い玉使って良いんだろうか。

などと半目になりながら思うが、鯛様は構わん!行こ!とばかりに飛び跳ね、

『ここから西へ数km進んだ地点に黒い玉の反応があるのを感知済みじゃ!』

「レーダー機能……………?」

サポート機能充実し過ぎだろう、この神様……………。

『お主、選んだ能力も欲が無いもんだったからのう。これくらいオマケじゃて』

「ありがとう」
『つむ』

喋りながら歩いて、川へと向かう。

「とりあえず、腹ごしらえ」

『焼きキノコ！焼きキノコ！』

「……………」

アンタも食べるんかい。

S i d e : : ? ? ? ?

1本のタバコを口に加えながら、僕は眼前の残骸を見つめていた。その残骸は、元は白いカプセルだった。

僕達が数年前に”とある組織”の研究所から救い出した少女のベツドとなっていた筈のそれは今は見るも無残な姿と化していた。

無理矢理内側から破壊されたせいか、外殻が歪んだり、割れたりしていた。

しかも所々から液体が漏れたり、火花が上がったりまでしている。一体どれだけの力で扉を殴ったら、こんな壊れ方をするのだろうか……………」

「本当に、すみません……………」

「いや、君だけのせいではないさ」

灰色のスーツの形を整えながら、背後から聞こえた声に振り返る。そこにいるのは、頭に1対の角を生やした金髪の女性だ。

スーツの上に白衣を着た彼女　プリオラは深々と頭を下げていた。

それに対して僕は手を小さく振り、頭を上げるのを促すと、

「プリオラ君。彼女が居なくなつた時の状況を詳しく教えてくれ」

「はい……と言っても私も、未だに良く解っていない……」

「解っていない？」

「ええ、本当になんの前触れも無く飛び出していったんです」

「……本当に何も無かつたのかい？何かに操られている様子は？」

「いえ、終始楽しそうな表情で……」

彼女の発言と同時に、後ろで機材を片付けていた緑髪の研究員がこける。

確かに、液体が垂れ流しになっているせいで滑りやすくなってるしなあ。

「大丈夫かい？」

「だ、大丈夫ですっ！ええ、大丈夫ですとも！」

声をかけると彼女は慌てて立ち上がり、頭を下げて部屋を出て行った。

なんで主任がおかしくなったア　！とか悲鳴を上げてたのだからうか。

「……元気だね」

「ええ、昨日から特に」

やっぱりあの子が起きたのが嬉しかったんじゃないか、と彼女は

微笑む。

が、それも一瞬ですぐに眉尻を下げた表情になり、

「あの、あの子の行先とかはもう解ったのでしょうか……？」

「ああ、向かった方角は解ったんだけどね……」

「本当ですか!？」

「この研究所周りの捕縛用の罠が幾つか起動していてその軌跡から方がうオ!？」

……ネクタイが引つ張　　って、怖ッ!？プリオラ君の眼が光って、怖ッ!？

「罠が起動してたって何があつたんですか!？というかこの研究所の周辺の罠は”危険度が高い侵入者にしか発動しない”っていう話じゃなかったんですかまさか業者が不良品送ってきてたんですか!？あの野郎どももしあの子に怪我とかさせていたらハッキングしてデータを全て『ドキッ!男だらけの青春!暑苦しい目眩めく一幕!』に置き換えてやる……!しかも全部映像データの顔部分を貴方に置き換えた上でよ!？」

「僕まで被害者予定リストに含まれてる!？」

「ちよつと顔の写真ブリーズ!あ、悶えた感じのヤツとかあるとベネね!？」

「その話聞いた後で提供すると思ってるのかい!？」

暫しの取っ組み合い。

僕、WIN。

「と、兎に角彼女の向かつてる方向は解ったから後は僕達に任せておくんだ」

「ぜえ……わ、解りました。でも、何か進展があつたら……」

「ああ、勿論連絡するとも。僕もこれから捜索に向かうしね」

「え？貴方まで、ですか？」

「こう、冷静に見せようと頑張ってるけど。内心、彼女が心配で溜まらなくてね」

頭を掻きながら、苦笑を浮かべてしまう。

「そう、ですか………すみません。気を遣わせてしまつて」

「いや、君と話していると僕も幾分か落ち着いてくるよ」

「む。私の慌てっぷり、そこまで酷かったですか………？」

「違う違う。そういう訳じゃないさ」

手に持った煙草の火を携帯用灰皿へ突っ込んで消し、

「あの子をここまで心配してくれる人が居て、安心出来るから、かな」

その言葉を最後に僕 高畑・T・タカミチは出口へ向けて歩き出した。

Side: 転生者 A

「何か、渋い兄さんに心配された気が」

『お主は一体何を言っているんじゃない』

走るー奔るー俺ーたーちー

鼻歌混じりに無表情な影が山を行く。

山と言っても見渡す限り岩、岩、岩。

見事なまでの岩山だ。

癒し要素の緑の欠片もあつたもんじゃない。

「こつち?」

『うむ。向こう側じゃな』

肩の上で鯛様が手の部分に当たる鱗を動かし、岩山の頂上を指差す。

『頂上の向こう側にある様じゃのう』

「随分、変な所に置いてある」

か。神様の力の結晶なんてもの、こんなところに落ちてて良いんだろうか。

『なあに、黒い玉は転生者以外から見たらただの水晶じゃしな』

「無害?」

『うむ。ちなみに黒い玉の力を使える事なんて滅多にないんじゃぞい?』

「選ばれし者……!」

『確かに今のところお主1人じゃし、選ばれし者じゃの』

「えっ」

『お主1人』

「なにそれこわい」

言いながら頂上に到達。

辺りを見渡しつつも、話を続ける為に鯛様を見る。

「どうして、私1人？」

『お主、能力は要らぬと言ったじゃろう？』
「言った」

でもその代わりに基盤の強化や成長のリミッター解除をして貰った筈だ。

『戦闘面ならそれだけで良いんじゃないが、他の部分のう』

「あー……」

『戦うだけではどうしようもない事もあるっ？』

鯛様は片手を上げ、ウインクを1つ。

『ま。これは儂からのサービスじゃ。勿論使用には儂の許可が必要じゃぞ？』

「ん。勿論」

神様の力なんて自由に使える様になったら、どうなるか解ったものではない。

一時の感情に左右されて世界が破滅、なんて事になりかねん。

「そういえば、他の転生者も居るの？」

『この世界にも既に十数人程おるのう』

「十数人……」

結構多いんだな。

『まあ、邪な考えを持っている者は転生前に脱落しておるし、安心して良いぞ？』

「変な人は、居ない？」

「いや、変人はいつぱいおるのう……」

うん。そういう人達とはあまり関わらないでおこう。
思考を切り替え、周囲を見渡しながら目を細める。
目に意識を集中させ探索を行う。
結果はすぐに出た。

「見つけた」
『早いのか』

足場になっていた岩から飛び降り、一直線に岩山に根を下ろす1本の樹の下へ向かう。

トンと踵で音を立て樹の目の前で急停止。
うーむ、この身体の使い方にもだいぶ慣れてきた。
まだ1日しか経っていないのに違和感もないし。

……ただなあ……。

プリーツスカートの手先をヒラリと捲り上げる。

『ウオオオオオオオオオ！？いきなり何をしてるんじゃないかありがとう
御座います』！

鯛様やかましい。

……違和感感じないのもどうなのかなあ。

女になったというのに違和感の欠片も無いのは、元男としてどうなのだろうか。

まあ今そんな事を考えていても仕方あるまい。

膝を折り、視線を下げればそこにあるのは禍々しいオーラを放つ
円球状の物体。

黒い玉だ。

「本当に落ちてる……」

『これは生まれたばかりの玉の様じゃな。運が良いのう、お主』
「うん」

頷きと共に玉を拾い上げ、

「んっ……!?!」

こそばゆい感覚に片目を閉じると同時に黒い玉が自身の身と同色の
光を放ち始めた。

何事かと思うが、瞬間、光は私の身体へと塗りこまれる様に溶け
ていった。

『そのまま状態だと運ぶのに不便じゃろ?手の甲を見てみると良い
ぞ』

「おお……」

見れば、赤い紋様が手の甲に浮かび出る。

中央に一本の両刃剣。

その左右に広げた翼を象ったが如き紋様だ。

なんだこれ格好良い。

『更に集めるとドンドンその紋様もパワーアップしていくぞい』
「ほおお……」

無表情ながらも目を輝かせる。

これは良い。凄く、良い。

「いっぱい、集めよう」

せっかくだし、腕いっぱいになるくらいまで。

『いや、それはどうなんじゃ……?』

だって格好良いだろう!?

樹の上に登り、世界を見渡す。

山の頂上という事もあり、見渡せる風景は実に広大だ。

そして、視界の遥か彼方には、

「大きな、街がある……」

『あれはこの世界の首都メガロメセンブリアじゃな』

「メガロ、メセンブリア……」

よし。決めた。

『ん?どうした?すぐにゲートを開かんのか?』

「秋だというなら、まだ少しだけ、ほんの少しだけ、時間がある」

『まあ、儂の見立てじゃと、ウェールズに雪が降るまで後1ヶ月程度は余裕があるのう』

十分だ。

もし会えなかったら会えなかったですぐに現実世界に向かえば良い。

そうと解れば、計画を考えるのも楽だった。

「メガロなら、もしかして、あの人が居るかも」

「あの人？」

「うん。会えない確率の方が、高そうだけど」

頷きながら片手を樹の幹へ添え、視線に込める力を強めて首都を見つめる。

「クルト、ゲーデル。あの人なら、力になって、くれる」

かも、と付け足すと同時に私は豆粒の様であった街へ向かって駆け出した。

しかし、この辺り獣とか全く見かけないなあ。

第3話 指針決定！そして新たな力！？（後書き）

ほぼ説明回という……！

原作キャラもちょっとだけ出て来ましたが、まだまだ若々しい高畑さんです。

次辺り戦闘が入る予定ですっ。

クルトさんも、出せたらいいなあ。

以下、オリキャラーズのイメージ画像です。

> i 3 6 1 1 0 — 4 5 1 4 <

第4話 はじめての闘争！今こそ名乗ろう！我が名は ！

夕焼けが影を照らす。

大地を疾駆する。

豪風が真横を抜ける音が耳に響く。

だが止まらない。

一步前に出て、身を捻る。

1秒以下の時間差で光が先程まで居た地点を穿った。

無視。

前に出る。

目標の場所まで後僅か。

瞬間、危険を感じる。

……加速！

受諾。

風の壁を突破するが如き速度で、転がる様に前に飛ぶ。

鱗に覆われた自身よりも巨大な腕部がクレーターを作り出す。

だが飛び込んだ先は目的地だ。

「これで

視認出来るのは腕とは違い鱗の薄い部分。

黒い体毛に覆われた胸部。

見据えると同時に全身を光が包む。

「終わり ッ！」

踏込。

大地を砕ける。
拳を天に突き上げる。
巨体が、宙を舞った。

Side : 拳闘士 R · S

俺達が修行も兼ねた冒険に出て、数ヶ月が経った頃だった。
まだ人の手が付けられていない遺跡が近場にある。
そんな話をとある村の酒場で聞いた。

勿論、俺達はその話に割り込み情報を収集する事を選択。
魅惑的過ぎるお宝の匂い。

そんな匂いを醸し出す遺跡の話聞いて、俺の冒険心は昂っていた。

男ならこんなトレジャーハントチャンス逃す手は無い。
意気揚々と俺達は遺跡へと向かった。

だが、そんな甘い話がそうそうある訳もない。
今思うともう少し場所以外も詳しく話を聞いておけば良かったと思っ
思う。

まあ 実際手は付けられてない様だった。

否、正確には”付けられなかった”のだろう。
何せ入口からして”竜種の溜まり場”と化していたのだから。

…… オイオイ、なんでこんなところに竜種が？

等と思うが応えは返って来ない。

代わりに竜種共が丸々とした目でコチラを見て来た。

コイツは俺の手にスッポリ入ってしまう程小さな妖精だ。
色々無理があるよな、うん。
現実を直視せねば。

幸い目の前には森がある。
そこに飛び込めば、

「シギヤア　　ッ！」

「やっぱ無理でしたア　　！」

森なんて関係ねえ！とばかりに薙ぎ倒して巨体が迫ってくる。

ついでに後ろから光の矢が何本か飛んでくる。

ああくそ！アイツ魔法まで使えんのか！？

……オーソドックスな竜種だな！クソツ弱点がなんかあればよう！

追走してくるのは全身を鱗に覆われた特に特徴の無い”ドラゴン

”と呼ばれる竜種だ。

ただの緑色の鱗が特徴的な”ドラゴン”。

黒い胸毛がキュートな普通の”ドラゴン”である。

だが現状においてはその普通さが厄介であった。

炎に近い属性を持っている”レッドドラゴン”等なら川に沿って逃げたりすれば、

多少相手は嫌がったりして速度が落ちるだろうに。

「ねえラオ。あそこの丘なんて家を建てるのに……」

「ラン、頼むからいい加減帰ってきてくれエ　　ッ！？」

ランを胸に抱く様にしながら全力疾走する。

既に平原に出た。

だが相手は構わず追って来る。

……ええいもうすぐ山を出るっていうのにまだ追ってくんのかこのドラゴン!?

どうやら縄張りとかそういう意識が無いようである。流石竜種。

「ハッ！私は何を!？」

「おおラン起きたか!？丁度いい！なんとか攪乱用の魔法を」

「ゲエ！竜種！ガクッ」

「気絶すんの早ア　ッ!？」

再度気絶した役に立たない相棒に嘆きながらもひた走る。

ていうか完全に気絶して力を抜けたせいか、さっきより重い。

このままじゃ　、

「シギヤアアアアアアアア!!!」

「ああもう駄目だア　ッ!？」

もう殆ど真後ろにドラゴンが迫っていた。

思い切りお口を開けて突っ込んできなさる。

後数秒あのマウスに我々は飛び込まされる事だろう。

ああ神よ。

そう、祈った瞬間だった。

橙色の影が残像を残しながら、ドラゴンの横っ面を蹴り飛ばした。

唐突な出来事を理解する間もなく、影の動きは連続した。

吹き飛んだドラゴンを追撃する様に影は迫る。

だがドラゴンとてやられてばかりではない。
相手は地上最強と名高い竜種だ。
並の戦士では傷をつける事すら難しい程の戦闘力を持つ。
その事実の通り、とんでもない速さを持ってドラゴンは迎撃を
始

まずは腕の一振り。

大木の如き巨碗を振ると風が唸り、大地が砕ける。

影は腕を僅差で避ける。

速度が一瞬落ちる。

そこで俺は漸く気づいた。

橙色の影は髪をツインテールにした幼い少女だったのだと
小さい。

明らかに1桁台の年齢。

しかも1桁台前半であろう。

そんな少女が背中を見せながら大地を蹴る。

待て、とは言えなかった。

ドラゴンも少女も動きが早すぎたのだ。

ドラゴンが額から魔法の矢を放つ。

少女が身を捻りそれを躲す。

近づけてたまるかとばかりにドラゴンが両腕を振り下ろす。

少女は加速し、身を転がす様にドラゴンの懐へ飛び込む。

唐突な加速に目を見開くものの、次の瞬間には口が動いていた。

いかん、と俺は叫んだ。

竜種の武器はその強大な力だけではない。

その巨体すら武器だ。

想像通り、竜種は脚部による体の支えを放棄した。

結果として現れるのは数トンはあるであろう巨体によるボディ
レスだ。

脳裏を潰された少女の姿が過ぎる。

手の中にあるランが髪を振り乱しながら暴れた。

気が付いた瞬間から一連の流れを一緒に見ていたらしい。
ランと2人揃って叫ぶ。

逃げて、逃げろと。

だが、次の瞬間に俺等は目を疑った。

金の暴風が吹き荒れたと思った瞬間

「は？」

ドラゴンの巨体が宙を舞っていた。

錐揉み回転するそれは間違ひなく竜種だった。

間違ひなく地上最強の生命だった。

胸毛がキュートなドラゴンだった。

轟音を立てて、ドラゴンが地面に叩きつけられる。

そして、ドラゴンが吹っ飛んだ地点には大地を踏みしめ拳を天に突き出す少女。

何をしたのは明白だった。

あ………ありのまま、今起こった事を話すぜ！

「突然幼女が戦場に飛び込んできたと思ったら無双していた」

「な、何を言っているのか解らないと思うけど、私達にも解らなかつた………」

「年齢詐称とか、実は種族違いとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ」

「そもそもあの小ささだったら、長寿族でもまだ子供だしね………」

「ああ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わった気分だぜ………！」

右手の中のランと一緒に呆然とした表情を浮かべてる。

そんな中、幼女は目を回すドラゴンへと近づいて行った。

「うええええ！？あ、危ねえぞ嬢ちゃん！？」

「そ、そうよー！？離れてえ　ッ！？」

絶叫するが、幼女は気にせずドラゴンの顔へと手を伸ばす。
その手から出るのは金色の光。
光はあっという間にドラゴンを包んだかと思うと、

「……………グル？」

「ん。ちよっと、我慢」

倒れた際に付いたと思われる傷を癒していく。

治療魔法か、何かだろうか。

ランへと視線を送る。

すると彼女は顔を左右に振り、

「ううん。あれ、魔力じゃないよ……………」

「じゃあ、あれは　」

「気、だと思っただけ。気ってあんな事まで出来るのかな……………？」

ランは少女へ不可解な物を見る視線を送る。

ドラゴンはというとすっかり傷が治ったのか既に立ち上がり、翼を広げていた。

あ、やべえ完全復活しちゃってるぞ、あれ。

「に、逃げ」

「大丈夫」

全力疾走を再開しようとした瞬間、幼女が声を上げる。

平淡過ぎるその声は場に響き渡り、種族を問わず、全員の視線を集める。

ドラゴンですら、首を傾げていた。

戦闘意欲は既になさそうだが、時折コチラをチラチラ見ている。
俺達は「飯じゃありません。こっち見んな。」

「これ、あげる」
「グオツ！」

少女が少し離れた場所に落ちていた袋から魚を何十匹か取り出す。
どうやらドラゴンを餌付けする魂胆らしい。
6 m以上の身長を持つドラゴンにはそれでも足りるかどうかは解らないが。

「グルル」
「うん。よし、よし」

どうやらドラゴン様はご満悦らしい。
幼女は無表情なままドラゴンの頭を撫でる。
ドラゴンもドラゴンで満更でもないのか頭を下げたて撫でやすい様に配慮していた。
なんだこれ。

「ドラゴンがこんな簡単に懐くなんて……」

ランも啞然。

俺も啞然である。

暫くするとドラゴンは魚を喰って飛び立っていった。
どうやら満足したらしい。
幼女がバイバイと手を振るとドラゴンも宙で咆哮を上げて返した。
ドラゴンが山に帰っていくのを幼女は見つめ続ける。
コチラに見せる背中には、どこか悲しみを背負っていた。
これは幼女とドラゴンの一瞬の友情物語である。

イイハナシダナー。

「……………今日の、晩ご飯、無くなった」

ぐー、と腹のなる音が幼女の声と共に聞こえ、思わずすっこけそ
うになった。

「って、腹減ってんのにやっちゃまったのかよ!？」
「ん?」

コチラのツッコミに幼女が振り向く。
無表情。彼女の顔を表すにはそれが適切だろう。
そういえば戦闘中でも全く微動だしていなかった。
それどころか息も乱してないし、汗もかいてない。
一体、この幼女は何者なんだろうか。
未知との遭遇に近い感覚に、若干危機を感じる。

……………だがまあ。

ランを抱き締めていた手を開放し、幼女を見る。
彼女は首を傾げてコチラの様子を伺っている様だった。

「助けてくれて、ありがとな」
「……………うん」

幼女は頷きを1つ。
命の恩人はどうやら確り意志疎通出来る様だ。
よし、これなら、

「あのよ……………良ければおれ」

「じゃあね」

「バイバイ、と幼女が手を振る。
おおバイバイな。」

……あれ？

ランが隣から半目を向けてくる。
いや確り挨拶はしたし何の問題も、

「つて、違い！？ちょっと待て！待てつてば！？」
「……？」

幼女が空っぽになった袋を手にコチラを振り向く。

なんか哀愁の漂う格好である。

良く見れば、彼女の服は砂塗れの埃塗れだった。

袋も所々破けてポロポロのものだ。

ツインテールも所々毛が跳ねており、暫く手入れがされていない
様だ。

俺があまりの惨状に声を詰まらせると、

「あのね。あのね。私達、よければ貴方にお礼をしたいのだけど…」

「………いらない、よ？」

ランが代わりに眉尻を下げながら提案するが、幼女はただ首を傾
げる。

心なしかソワソワしている様にも見えた。

もしかして礼を言われるのに慣れていないのだろうか。

奴隷というものが、この世界にはある。

姿を見るに、彼女もそれに近い存在だったのかもしれない。
ならば、男として見過ごす事は出来まい。

「いや、そう言わずにさせてくれ。ここまでされて礼の1つも無し
じゃ、男が廃る」

「……」

「ね？お兄さん　ラオっていうんだけど、この人もこう言ってる
事だし」

「ラン、お前が一番何もしてなかったんだから、お前が一番礼を尽
くせよ」

「ええ！？そこは一家の大黒柱としてラオが代わりをしてくれるん
じゃないのー!?!」

「まだその妄想続いてたのかよ!?!」

ギャース力騒いでいると、幼女の動く気配。

彼女はコチラへ近づいてくると、

「じゃあ
「じゃあ」

無表情のまま、コチラを見つめて来た。

そのまま暫し逡巡する様に、沈黙。

口元に手を当てたり、自分の肩を見たりと拳動不審だ。
いいぞ、幼女よ。

君の過去に何があったかは知らないが、命の恩人だ。
出来る限りの礼はしようじゃないか。

ランを見ると、彼女も頷いた。

どうやら心は同じらしい。

以心伝心な相方が居て、俺は幸せ者だ。

等と思っていると、幼女が意を決した様な秀囲気で再度顔を上げ
た。

おお、決まったか！さあ幼女よ！なんでも来るが良い！

「お風呂、貸して下さい」

瞬間、あまりにも些細過ぎる願いに思わず俺達は揃って泣いた。

S i d e : 転生者 A

この世界の住民マジ優しい。

狭い浴槽の中、身を縮めながら湯船に身を沈め、今日1日の感想を漏らす。

つい数時間前まで山超え、谷超え、メガロメセンブリアを目指していたのだが、

……やー、まさか道中でドラゴンがヒヤッハーしてるとはなあ。

しかも虎っぽい人が襲われているのを発見。

助けたら近場の村で宿までとってくれた上に風呂まで入れてくれた。

研究所から抜け出し、走り続け3日間。

色々恋しくなったものがある。

その1つが風呂だ。

転生前は当然の様に入れた代物。

道中に幾つか川はあったが、

……冷たい水しか流れない川じゃ水浴びなんて無理ですたい。

結構今、寒いのだ。

下手に寒中水泳なんてしては、凍え死んでしまう。

だがそんな中に現れた、2人。

笑顔で俺達に全部任せると言ってくれた心優しい人々。

その優しさに思わず感涙してしまいそうである。

鉄皮面は相変わらず微動だにしないが。

……うーん、しかし。思い返すとんでもない事したなあ、自分。

思わず飛び込んでしまったが、良く勝てたものだ。

湯に沈んでいた両手を目の前に翳す。

視線の先にあるのは、赤の紋様。

「黒い玉の力、凄い」

『じゃろ？じゃろ？やっぱ神様パワーって凄いじゃろ？』

「回復、攻撃なんでもござれ」

鯛様の指示通りにやっただけだけど、ドラゴンの傷とかすぐ直ったし。

攻撃に関しては気絶させる効果を付与した衝撃波を出せたりと、

……”鯛様に承認して貰えば何でも有り”とか便利過ぎる気も……。

こういう能力は反則ではないのだろうか。

『フッフ、しかも望めば世界創造までやってのける！そこに痺れて憧れるオ！』

「すげえ」

そこまで出来るんかい。

『ああんもつと褒めて良いんじゃよ!?!?』

湯船の中で鯛様がピチャンピチャンと身を跳ねさせる。

ちなみにこの鯛様、お礼をくれた人達にも見えてなかった様だった。

やっぱり転生者以外には見えない仕様らしい。

「ふい」

『おー、見事に蕩けておるのう』

数日ぶりのお風呂なんだから仕方なし。

湯船に顔を半分沈めながら目を閉じる。

長髪が水面に浮いて蛇の様に揺らめいていた。

……髪、長えツスなー……。

マイボディの筈なのに、凄い客観的な感想しか出ない。

傷一つない肌に小さい掌、足、胸、後は　　。

「!?!?」

『むむ?』

唐突にボツと顔が赤くなる。

むむ、急に違和感が。

というか、初めて顔に感情が出た。

いや、顔は若干眉尻を下げてただけだが。

しかし、流石に男の身体との違いを直視してしまうとなんというか、

……恥ずいぞこれ！

見れば鯛様がニヤニヤとしていた。
何その待っていましたとばかりの顔。

『ククク、完全適応してしまったと思っていたが、恥じらいを知る
歳か！？ん！？』

「……」

ブクブクブク。

反論しようとするが、思わず自身の身を抱きしめて黙ってしまう。
小さい、本当に小さい身体だ。

そして柔らかく華奢なシルエツト。
過去の自身とは似ても似つかない。
意識してしまうと途端に恥ずかしくなる。

……クツ、今まで服を脱がなかった反動が今になって来るとは！

鯛様は相変わらず水面から覗かせた顔に笑みを浮かべたままだ。
そういえばこの魚介類様、TS好きでしたね。

『幼女になった事を葛藤する姿……良い！』

「やかまし」

『ぶぎゅ』

ベチャツと掌を鯛様の顔に被せて沈ませる。

そのまま掌の下でニヤニヤしたままエラ呼吸し始めた。
とりあえずさっさと身体を洗ってしまおう。

このままだと変な気分になってしまいそうだ。

身体を洗ってる際、色々触ってしまい変な声を上げてしまった。
良い笑顔を向けて来た鯛様は石鹸で作った泡地獄に沈めておいた。

風呂から外へ一歩踏み出すと、狭い脱衣所に出る。
着ていた服は洗濯に出してくれたらしい。

「…………ワンピース」
『良いセンスじゃぶぎゅ』

うるさいです、鯛様。頬ぶにぶにしてくれる。
しかし、と黒いワンピースを両手で広げる。

…………うーむ。さっきまでの恥ずかしさはそこまで感じないな。

どうやら服に関しては女物でも全然羞恥心は働かないらしい。
よってこの服でも全く問題無しである。

身に服を纏い、準備完了。
暖簾の様にかかっていた布を左右に分け、リビングへ出る。
よくよく考えると、風呂が付いてるとか個室とか結構高いんじ
やなかるうか。

「出た」

「おう。どうだ？さっぱり出来たか？」

リビングの中央に白い体毛に身を包んだ虎獣人 ラオの姿があ

った。

青い甚平に身を包み、テーブルに座る彼の問いに対して返すのは、首肯。

マジですつきりさっぱりしました。ありがとうございます。

あ、ちなみに自己紹介はしておきました。

最初は敬語で話そうとしてたら、堅苦しいのは止めると言われて今の口調である。

「つて、あー!? 髪びしょ濡れだよー!? ちゃんと拭かなきゃ駄目だよー!?」

「ん」

声が聞こえると同時に頭にタオルが押し付けられた。

視線だけ動かして、見る。

そこでは小さな4枚羽の妖精　ランが両手でタオルを上下に動かしていた。

まったくもー、と彼女は眉尻を立てた顔で、しかし丁寧に拭いてくれる。

その気持ちよさに目を細めていると、

「じゃ、とりあえず拭き終わったらちよつち事情を聞いて良いかい?」

「!」

ビクリと身を跳ね上げる。

え?事情って何を?ハハハ、私は極一般的な転生者ですよ。ハハハ。

つて、転生者とか言える筈ねえし!?

「話さなきゃ……ダメ?」

「いんや、別に良い。無理にとやかく詮索するつもりはないしな」

ラオはそう言い、ウィンクを1つ。
その仕草が男だけど豪快な笑顔も相俟って、妙に似合っていた。

「……………」

「んっしょ、んっしょ」

ホツとする私に対して、ラオは表情を切り替える。
笑みから一変、真剣なものへとだ。

「どんな事情を背負ってるのかは知らねえが、お前さんは俺達の命の恩人だ」

「そこまで、大袈裟に、言わなくても」

「いんや、事実だからな」

そう言いながら彼は立ち上がり、コチラへと歩を進める。

そして、自分の目の前に立つと彼は膝を折り、私と視線を合わせ
て来た。

「何でも言ってくれ。恩は返す。それが俺の流儀だ」

「私にも言ってるね！全力で返しちゃうよー！」

「ラオ、ラン……………」

やだ、この2人、本当に優しい……………。

思わず目頭が熱くなる。

涙とか出ないけど。もうやだこの鉄皮面ボディ。

ともあれ、と頭を振る。

好意は嬉しいが、過剰に受け取る訳にもいくまい。

「でも、もう返して、貰った。十分」

「んあ？」

「お風呂」

「んなもん、俺達が宿借りる時のついでだ。返した内に入らねえよ」
「というか私一緒にお風呂入り忘れたー！」

ニヒルに笑うラオと、ズギヤーンと何故かショックを受けるラン。
というか、ラオのなんとという男らしさ。
元男としては尊敬しまくりである。

「うう、スキンシップしたかったんだよー……」

「よしよし」

涙目のランの頭を撫でながらほっこり。

『うむ。良い者達じゃなあ』

右肩に乗る鯛様の頷きにも全面的に同意である。

「とりあえず、どうしたもんかな……何か欲しいものとかあるか？」

「ない、よ？」

「……嬢ちゃん、少しくらい我儘言っても大丈夫だぞ？」

え？なんか凄い不憫なものを見る目が向けられてる？

わ、私は元気だし！いきなり研究対象扱いされたけど、不憫じゃないし！

「……ほんと、無い」

「……そうか」

彼は頭を片手でボリボリと掻きながら、どーしたもんかなーと呟

く。

「じゃあさじゃあさ」

「んっ」

目の前に唐突に小さな影。

ランだ。

彼女は心底楽しそうな笑みを浮かべ、

「君、どこかに向かってたんだよね」

まあ、あの格好を見たら旅の人間だつてくらいは解るか。
事実だし、隠す事も無い。ここは正直に話してしまおう。

「ん。メガロ、メセンブリアに、行く」

「じゃあ、私達がそこまでエスコートしてあげよー！」

えっへんとランは小さな胸を張りながら高らかに宣言。

「強さ的には嬢ちゃんの方が上だからむしろエスコートされそうだが……」

「げふう！？そ、そういう事言わないのー！ラオ、男でしょー！」

「そらーまー、その通りなんだがなー。あの戦い見せられた後じゃなあ」

「う。まあ、確かに……」

半目でコツチを見ないで下さい。

「……じゃあ、それ、で」

このまま断り続けると、間違はなく問答が続く。それならば男らしくさっさと決断してしまうに限る。でも正直なところ、ついて来てくれるなら嬉しい。

鯛様が居たから淋しくなかったが、旅は人数が多ければ多い程良いのだ。

そういうものなのだ。

「って、そつえば嬢ちゃん」

顎に手を当てていたラオがふと気づいた様に言う。

「何？」

「嬢ちゃん、名前は？」

ピシリ、と固まる。

……なんて答えよう、鯛様。

『ふむ。アレなんてどうじゃろう。ほれ、お主の元の名前。アレなら』

……あー、そつえば自分の名前、アスナと似てるなあ。

転生前の名前そのままなら、名乗っても違和感が無いし。

そつと決まれば後は言うだけ。

並んでコチラの言葉を待つラオとランへと顔を向け、

「アスカ。アスカ、って、呼んで？」

『ところでついて来て貰うのは良いが、研究所から追っ手とか来ないかのう？』

「あ、」

第4話 はじめての闘争！今こそ名乗ろう！我が名は ！（後書き）

次はクルトの出番があると言ったな。あれは嘘だ。

ここまで見てくれた方々には最大限の感謝を！

感想などがありましたら是非ともお願い致します。 （：3「（

主人公の名前が出てなかったので今更ですが、名乗りです。

次回辺り、メガロに到着します。

ちなみにラオ・ランコンビは原作22巻で出てたあの獣人妖精コンビです。

メガロまで走りっぱなしもアレなので、道中の話を1つ。

彼らの出番は、短いかもしれない……。――（：3「（――

第5話 嗚呼麗しのメガロメセンブリア！急転直下の超展開！？（前書き）

今回、見た目だけ他作品の登場人物が登場します。

申し訳ありませんがそういった展開が苦手な方はご注意下さい。

第5話 嗚呼麗しのメガロメセンブリア！急転直下の超展開！？

Side：転生者アスカ

ラオ・ランコンビとの出会いから3日が経過した。

丁度研究所から脱出して、1週間が過ぎた訳だ。

今のところ追っ手の気配も無い。

最初の1日は異常に警戒してラオ・ランコンビに引っ付きっぱなしだったが、

……なんか終始ラオ達に凄い優しい目で見られただけだったしな！

2日目からは少し離れたりする様にもしたが、変わった様子も無い。

3日目は物陰からチラチラ見るだけにしたが、問題無し。

どうやら研究所からの追撃は無いらしい。

フッフ、やはり全力疾走で山越え、谷越えをしたのが効いたのだろっ。

「おーい、アスカ。そろそろメガロに着くぜ」

「あ……っん」

「凄いよー！大都会だよーッ！」

む。思考の海に浸り過ぎていたらしい。

何時の間にか背後にラオとランが居た。

そちらへ振り向く前に、視線を右に向ける。

硝子張りの窓を覗くと、眼下に巨大な都市が広がっていた。

現在自分が居るのは、金属で出来た空を飛ぶ魚の腹の中。

「コチラの世界で”舟”と呼ばれるものらしい。」

そういえば、原作でも魔法世界編で活躍してたっけ。

『親近感を感じるぞい』

「形が、一緒……」

この舟の形状、妙に鯛様っぽいのだ。

「しかし乗せて貰えて助かったねー。歩きだと1週間は掛かったやうし」

「だよなあ。おやっさんに感謝しねえとな」

「ん」

おやっさんというのは、この舟の持ち主の事だ。

筋骨隆々の禿頭が眩しい老人で眼光がめっちゃ鋭い。

一般人代表みたいな私は思わず怖くてラオの後ろに隠れてしまったものだ。

情けない？ 幼女ボディならなんの問題も無い！

『だいぶ染まってきたのう』

……葛藤が少なくて残念だったな、鯛様！ 適応能力にはちょっと自信があるんでね！

『感情を思いつきし揺らしながら言われても説得力無いぞい』

……なんの事かなあ！？

というかマイハート覗けるとかプライバシー侵害ですよ、鯛様。

そういえばこの鯛様、不思議空間でも覗いてたっけ。

……スケベエ……。

『なんかいきなりスケベ扱いされた！？ 儂、そっちの欲は無いんじやぞー！？』

神様なんじゃぞー偉いんじゃぞーと鯛様が言ってくるがスルー。

「……………ん？どうしたアスカ。ポーツとしちまって」

おつと、どうやら鯛様との会話に夢中になり過ぎていた様だ。

ちなみに鯛様とは念じるだけで会話出来るのをつい最近知った。

ラオ達には鯛様が見えていない様だし、彼等の前ではその方法を用いているのだが、

……………傍から見たら、ただポーツとしてるだけなんだよなあ。

『無表情に虚空を見る幼女というのも、良い！』

……………そーなのかー。

鯛様の咆哮を無視してラオと視線を合わせる。

彼の肩の上にはラオと同様に心配そうな表情を浮かべるランの姿。

「なんでも、無い」

「そ、そう？ホントーに？」

「気分が悪かったりしたら言っただぞ？」

やだ……………やっぱりこの人達優しい……………。

「ん……………ありがとう」

「いいのいいのー！アスカはもっとドーンツと甘えて来ていいんだよ」

「おつ。お前はまだまだガキなんだから、遠慮なんてすんじゃねーぞ？」

すみません、中身は結構大人です。

正確に言つと、

……あう？

チリリと頭の中で火花が散る。

む？何歳だっけ？20代前半？後半？うん？いかん、自分の年齢
忘れた。

……うーむ？まあ、その内思い出すか。どっちにしても今幼女だし。
『どうかしたかの？』

……いや、なんでもないツス。ちよつとド忘れを。

『むむん？』

身体を捻り、首を傾げる様な動作をする鯛様に、大丈夫ツスと言
つて一息。

頭を小さく振って、改めてラオ達を見るとジーンとコチラを見て
いた。

ランは何故かオロオロとしている。

あ、会話を途中で途切れさせちゃったからか。

「……遠慮、しないよ？大丈夫、だよ？」

「そ、そう？約束だよ？」

オロオロするランは可愛いなあ。

この鉄壁フェイスが無ければ思わずニヤニヤしていた事は間違
ない。

「おい！小僧どもそろそろメガロメセンブリアに着くぞ！降りる準
備しとけ！」

む、この敵つい声はおやっさん。

「こんな怖い口調だけど、良い人なんですよ？」

「準備、しよ？」

首を傾げながらラオ達の荷物を指差す。

表情に感情が出づらい為、仕草で補う事にしたのだ。

その動作にランは少し戸惑った様だが、すぐに笑顔になると、

「そだね！」

「うっし、じゃあとつとと荷物纏めちまうか。ランとアスカはゆっくりしてろ」

「手伝う」

「私も手伝うよー！？」

「ちみっこどもに任せる程の作業量はないってーの」

カラカラと笑いながらラオは荷物の方へ向かって行く。

なんかその頼もしい背中が、

「お父さん、みたい……」

「え？」

「ラオ、お父さん、みたい……良いな」

「アスカ……」

生き返ったら、ああいう漢らしい背中を見せる事の出来る大人になりたいものだ。

……ん？

ラオの背中から視線を外してランを見ると、何故か彼女は涙目に

なっていた。

いや、本当に何故。

疑問が頭を過ぎると同時、ランの姿が掻き消えた。

続いて、胸に衝撃。

「!？」

「アスカア ツ！」

見れば胸元に張り付く、目尻に大粒の涙を溜めたランの姿。

唐突な展開に目を白黒させてしまうが、彼女は気にせず真っ直ぐ視線を向け、

「私の事、お母さんって呼んでも良いんだよ!？」

「いや、それ、無理」

「ちよつ、なんでえ ツ!？」

だって、ちっちゃいし。

Side：ラオ・バイロン

アスカという少女は、どういう人生を送って来たのだろうか。

俺は最近、あの少女を見る度にそんな事ばかりを思う。

それなりに腕に自信がある俺等よりも確実に上の実力を持つ少女。
それでいて、

……淋しがり、なのかね。ありゃあ。

出会ってからの3日間、彼女を見てきた感想がそれだ。特にその性質が顕著に出ていたのが出会った翌日だった。とにかく自分達から離れようとしな

しかも俺とランが一緒に居ないと表情には現れないものの、凄まじく狼狽する。

見知らぬ者が近づけば視線を鋭くして威嚇するし、

……親猫を取られまいとする子猫みたいな感じか？

2日目からは俺達は結構強いんだぞという風に教えたら、少し離れる様になった。

だが相変わらず付かず離れずといった距離。

あんまり長時間離れると心配するという点では変化無し。

表情には出ないが、そわそわしだすのだ。

定期的にコチラを見ては、大丈夫？と問いかけてくる。

3日目は時折姿が見えなくなった。

まあ、振り返ると大体壁からチョココンとツインテールが出てるのが見えたが。

小動物っぽくて微笑ましいものを感じてしまったのは記憶に新しい。

……本当に、あの子はナニモンなんだろうな……。

正体については聞かないでくれと暗に言われた。

つまり、彼女は現在、自分の身の上を聞かれては拙い状況にあるという事だ。

それを踏まえた上で予想してみる。

俺の予想はこうだ。

とある事情により天涯孤独の身となったアスカ。

彼女はその戦闘力に目をつけられ、とある商人に奴隷拳闘士として買われた。

きつとあの無表情っぷりもその頃に……。

勿論俺達でも勝てる気がしない彼女に勝てる奴なんてそうは居ないだろう。

そこまで酷い目にはあっていないと願いたい。

だが、彼女は対戦相手を気遣ってしまい、中々本気を出せない。例え傷つけても、あの治癒能力で癒してしまう。

そんな事じゃ試合が盛り上がる訳もなく、雇い主は苛立っていた。

そしてついには、彼女を名のある富豪に売り渡してしまおうと考える。

あの整った容姿だ。

将来は間違いなくべっぴんさんになるだろう。

それなりに良い服を着せられ、連れてかれる彼女は道中で思う。

普段と扱いが違う。

何かがおかしい、と。

幼いながらに危機を察知した彼女は持ち前の身体能力で脱走。

見栄えを良くする為、”首輪”が付いていなかったのが幸いしたのだろう。

運良く脱走は成功した。

さて、脱走に成功したとして、彼女は何処へ行こうというのか。

彼女にメガロに付いたらどうするのか？と尋ねた際、こう言っていた。

人に会いに行く、のだと。

つまり、彼女にはメガロメセンブリアに知り合いが居る。

そこまで辿り着ければきっとどうにかなる当てがあるのだろう。

例えば、遠い親戚等。

だが、だがしかした。

相手は彼女が奴隷になるのを黙って見ていた親族だ。

果たして、彼女がそこまで辿り着いたところでまともに取り合っ
てくれるのか？

答えは限りなく”否”に近いだろう。

だが彼女はこの数日の様子を見るに、愛情に飢えている。

例え僅かな可能性でも縋りつきたいに違いない。

ならば、ならばこそだ。

もし彼女が頼ろうという人間が非情だった場合、俺達が守ってや
らねばならない。

そう、俺達には彼女には恩義があるのだ！

背後から聞こえた”お父さん”というアスカの呟きに胸が熱くな
る。

任せるアスカ。

お前はこの俺達が必ず守ってやるからな！

「……なんか、ラオ、燃えてる」

「あー、なんか妄想してるねあれー。たまにあるの。気にしなくて
いいよー？」

Side：転生者アスカ

というわけでやってきましたメガロメセンブリア。

ここは港から少し歩いたところにあるカフェのオープンテラスだ。
頭の上に広がる黄色いパラソルがオシャレである。

その下の白く円いテーブル上には3つのカップが置かれており、
それぞれの前にラオ、ラン、私の順で座っている。

「で、アスカ。その知り合いっていうのは何処にいるんだ？」

「いきなりだねー、ラオ。どしたの急に。やる気満々？」

「あたぼうよ」

「……うん。ありがとう。でも……」

続ける言葉を悩み、言い淀んでしまう。

ラオ達は首を傾げるが、目を閉じる動作で暫し黙考の時間を要求する。

脳を冷却する為、カップを手に取り、中身を啜る。

むう、見事なまでのオレンジジュース。

褒めて遣わす。女将を呼びべい！

『それ、普通に市販のパックから流し込んでおったぞい』

……アーアー！おいしーなー！このオレンジジュースーッ！

それはともかく。

知り合いというのは、クルト・ゲーデルの事だ。

彼の居場所については勿論、

……解らないでゴザル。

『情報収集もまだじゃしな』

そもそもメガロメセンブリアに常駐してるのかが疑問だ。
実際、会えたら僥倖。

会えなくてもすぐに現実世界に向かうつもりで居たのだ。
だから簡単に情報収集するつもりでいたのだが、

……追っ手を警戒しててそれどころじゃなかったしなあ。

『ま、今からでも十分間に合うじゃろっ』

……そうだね。でも、もうオスティアとかに行ってたら流石に会えないよなあ。

『そうじゃなあ。せっかくじゃし、道端でも歩いてくれていると助かるんじゃないの？』

……ハハハ、まさかそんな都合良い事あるわけないでしょー。

『そうじゃなあ。人生、そんな上手く行く筈ないじゃろうしなー』

……ハハハ、だよー。

とりあえずやらねばいけないのは情報収集だ。

ラオ達とはここで一旦別れるとしよう。

これ以上迷惑をかける訳にもいかないし。

よし。方針は決まった。

後はこれをラオ達に伝えるだけだ。

意気込みを胸に、目を開く。

「いやあ。ここの紅茶は中々いけますね」

「あらあら良かった……オススメした甲斐がありましたわ」

そのまま全力で眼が見開かれた。

瞬間、跳ねる様にして椅子の上に立ち、凝視する。

大きく開いた瞳に映るのは、ラオ達の背後。

視線の先に、彼らは居た。

「ど、どうしたアス力？」

「何？急に椅子の上に乗ったりして、何か見つけたの？」

見つけた。

ええ、そりゃあもう見つけましたとも。

え？何この天文学的確率での遭遇。

「ご都合主義なの？幸運スキル持ちなの？」

『えー』

鯛様もそんな『何それご都合主義過ぎね？儂、超幸運持ちの設定とかしてないんだけど？』的な顔でコツチ見ない。

目を両手で擦るが、視線の先の人物達は消えない。

幻じゃない。

目を閉じてもう一回開いても、ほうらそこには、

「フィオネ君のオススメですからね。不味い訳がないですよ」

「ふふっ、クルト様だったら……お世辞が上手ですわ」

「いやいやお世辞などではなくてですね」

オープンテラスの隅の席に腰かけて優雅にティータイムを楽しむスーツ姿の男。

原作よりもずっと若々しいがああの髪型に、眼鏡。

あと腰に携えた刀。

間違いない。

クルト・ゲーデルだ。

その向かい側には某ISでちよろいさんとか呼ばれてる方が、

「えっ」

『えっ』

「ん？」

「ほへ？」

「あら？」

「む？」

「むう！？」

上から、私、鯛様、ラオ、ラン、ちよろい　もといフィオネさん、クルトである。

というかクルトさん超目を見開いてコツチ見ないで下さい。見た目が見た目だから仕方ない気もしますが。それよりもフィオネさんですよ。

否。セシリアさんですよ。

いや、待て私。

もしかしたら似てるだけなのかもしれない。

世界が違うし、他人の空似という事もあり得る。

腰まで伸びた金の髪。

髪の両サイドにアクセントの様に輝く縦ロールが実に麗しい。

白を基調としたロングスカートのスーツ姿も実に麗しい。

整った顔立ちに柔らかい目つき、ちょっと長いまつ毛も実に麗しい。

肩に乗っている雫みたいな精霊も実に

『あ。あれ儂の知り合いの神じゃ』

……転生者かよ！セシリアさんモデルかよ！

ガターン！と派手に音を立てて地面に両手両膝を突き立てる。その姿はまさに人生に挫折した者の如く。

「お、おいアスカ！？」

「どうしたのアスカ！？」

「……なんでも、ない」

まさか他作品の登場人物の姿をした転生者が居るとは……。とにかくラオ達を心配させる訳にもいかない。

「大丈夫、だよ……」

身体をよるめかせつつ、立ち上がる。

なあとまだ世界観が1つ破壊されただけだ。

ふふふ、と笑う私にラオが心配そうな表情を見せる。

大丈夫だよ、ラオ。私はまだ頑張れるから……。

「ハッ！まさかコイツがお前の探していた……！？ってどっかで見た事あるような？」

「あー！この人この前選挙に出てた人だー！」

ランは叫びつつ、クルトを人差し指で示す。

へえー、選挙とかやってるんだ、MM元老院って。

「……あら、そういう事ですか？」

そういう事ってどういう事ですかお姉様。

『よっ！』

『よっちゃん！』

鯛様達も仲良さ気に挨拶してないで早く事情説明をして下さい。

もつやめて！私の頭の中は急展開の連続でボドボドよ！

「ちょっと良いですか」

「！………なん、ですか？」

はっと顔を上げれば何時の間にか真正面に白い棒が2本。

否。それは棒ではなく、何時の間にか接近して来ていたクルトの足だ。

見上げれば、彼は真剣を体現したかのような表情を一気に崩し、

「よければこれからお茶会でも一緒にどうぞでしょう」
”お姫様”

とても良い笑顔でお誘いをいただいた。
願ってもない。

コチラとしても彼と話したいと思っていたのだ。

この提案は渡りに船。

まさに順風満帆な流れだと言えよう。

だが、しかし。

貴方の笑顔はとても素敵なのですが。
提案自体はとても魅力的なのですが。
ええ。実に素敵で魅力的なのですが。

……その皆に見えない様にチラチラ見せてる”捕縛”って描かれた
符はなんでしょう？

無表情のまま、冷や汗をダラダラと流す私。

対してニコニコと笑みを崩さないクルトさん。

周りの人々は、呆然と見ているしかなかった。

『我等揃って水魚の交わりコンビ！』
『イエーイ！』

やかましい貴様ら、煮るぞ。

『ひい！』

第5話 嗚呼麗しのメガロメセンブリア！急転直下の超展開！？（後書き）

情報収集パートは犠牲になったのだ……。投稿速度の犠牲にな……。

ここまで見てくださり、ありがとうございます！

ご感想などがありましたら、どうぞよろしくお願い致します。

うーむ。やっぱり急展開過ぎですかね？

あまり長々とやるとグダってしまうので、

申し訳ありませんが、かなりご都合主義で進めておりますっ。(；

・・・)

今回はクルトさんとのOHANASHIタイムです。

以下、早いですが今回現れました新たな転生者フィオネさんの設定画です。

> i 3 6 6 6 2 — 4 5 1 4 <

彼女についてはまた次話にて詳しく……！

第6話 話をしよう！眼鏡と私と事情説明！

Side：転生者アスカ

「1、2時間で程、貸し切りにさせていただきたいのですが」
「ふむ。1、2時間ね……別に良いが、なんでまたお偉いさんがいきなり……」

「そこはまあ、色々あるという事で」

「詳しくは聞くなつて事かい？」

「フフフ、別に私は何も言っていないませんが？」

なにこれ怖い。

視線の先ではカウンター越しに髭が渋い店主とクルトが笑い合っていた。

ただ笑みを向け合っているだけだというのに、何このプレッシャー。

……これが出来る大人のプレッシャーというものか……！

『物凄く駄目人間臭い発言じゃぞ、それ……！』

……泣くよ!？

内心涙目で叫んだら、頭を撫でてくれた。

鯛様はやっぱり優しかった。

『幼児化が進んどるんじゃないかのう、これ……』

……ん？鯛様、何か言った？

『なんでもないぞい』

ふう、と一息。

どうやら店主とクルトは続けて貸し切りの代金について話し始めた様だった。

交渉はもう少し続きそうだ。

ラオとランは店の隅で何やら話し合っていて、輪に入れそうもない。

なら少し時間もあるし、彼女と話すとしよう。

「フィオネさん」

ずっと隣に立っていたフィオネへと身体ごと向き直る。

彼女は私に名前を呼ばれると柔らかい微笑を浮かべたままコチラを見た。

良く手入れのされていると思われる金の長髪が振り向きの動作に釣られて靡く。

凄まじい美人さんだ。

街で見かけたりしたら、普通の男ならば思わず振り返ってしまうに違いない。

「はいはい。なんですの、リトルプリンセス？」

「リトル、プリンセス……」

「気に入りませんでしたか？」

「……別に、良い」

見た目はそのままだしなあ。

「では、質問をどうぞ？」

『どっぞっちやー！』

首を傾げる彼女の肩に雫の様な形をした神様の姿。

「……その、子は？」

「ああ、この子は……」

「水神だっちゃ！」

「喋り方が鬼つ子エ……」

「水ちゃん」

「なんか凄まじく可愛らしくされたっちゃ！？」

ズガビーンと効果音を背負いながら水神は墜落した。

地面に落ちて弾けた。

神様だし大丈夫だろうと全員スルー。

世は無常で無情である。

「儂は？」

「鯛様」

「鯛の神様ですか？」

「違うよ！？」

ズギヤーンと効果音を背負いながら鯛様は墜落した。

地面に広がった水神の上に落ちた。

まるで陸に打ち上げられた魚である。

「まあ、この子達は置いておくとして」

「『さりげなく放置された！？』」

「旧交を温める為にも、少し戯れてなさいな」

「『『ういまむ』』」

案外簡単に言う事聞くだね。

フィオネさんなんか怖いし、仕方ないね。

でも神様としてそれで良いのだろうか……。

「何か？」

「なんでもないです、まむ」

「よろしい」

フィオネは胸に手を当てながら楽しげに微笑む。

人を安心させる様な、暖かな笑顔だ。

もしかして今までの会話はコチラの緊張を解す為のものだったりするのだろうか。

……多分、この人良い人だ！

自分は直感を信じるタイプである。

故に彼女を真っ直ぐ見つめ、問う。

「助けて、欲しい」

簡潔に自分の望みを告げる。

自分勝手だとは思う。

だが、クルトの傍に居る転生者である彼女を仲間に取り込めれば、それだけで作戦の成功率は一気に上昇するのだ。

「助けて、ですか？」

彼女は唐突な私の願いに首を傾げる。

しかし、その戸惑いは一瞬。

次の瞬間には笑みを戻し、私の頭に手を置いた。
温かい手だ。

自然と目が細まり、体の力が抜ける。

「仲間の頼みですしね。わたくしに出来る事なら力になりますわよ

「？」
「ふい」

撫でられると思わず情けない声を上げてしまった。
その声に彼女は楽しげに笑い声を漏らしながら、撫でるとい
う行為を続行。

「……」
「よしよし」

いかん。本当に気持ち良すぎる。

普段は微動だにしない鉄皮面すら蕩けてしまう様な恍惚感が沸いて来る。

このままでは液体人間になってしまう。

『なんか知らない内に姉と妹の微笑ましい光景みたいのが繰り広げられてるぞい』

『鯛ちゃん、静かに！今良いトコロっちゃよ！』

何がだ。

「それで、頼みというのは……あら？」

頭の上の手が彼女の疑問符と共に止まる。

……？

なんで撫でてくれないのか。

目を開け、彼女を見上げる。

頬を赤らめながら、横を向いていた。

釣られる様にそちらを見る。

「フィオネ君、お姫様。お茶会の準備が整いましたよ」

変態眼鏡が居た。

「まあ、流石クルト様。手早いですわ」

「フィオネ君にはお姫様のお世話を任せてしまいましたからね。私もやるべき事はしっかりと迅速にやらねばならないでしょう?」

「いえいえ、この子とても可愛らしくて……むしろ私が癒されてしまいましたし」

むう。

「……」

「……何故睨むのですか、お姫様」

なんでもないし！邪魔されたからって怒ってないし！

そもそも撫でられたくらいじゃ気持ち良くないし！

『滅茶苦茶喜んでたがのう……』

『自分に正直に生きるのが一番っちゃよ!』

煮ますよ。

『ひっひっ』

現在カフェの中央には、5つの影がある。
白い円形のテーブルを囲う様にしてあるのが4つ。
最後の1つはテーブルの上にあった。

テーブルの周囲を囲うのは、私、クルト、ラオ、フィオネだ。
そして、ランがラオの目の前に座っている形だ。

彼女は心配げな表情でコチラを見ながら、

「大丈夫、アスカ？この人達に変な事されなかった？」

「大丈夫、だよ」

頷き、ランの頭を撫でる。

彼女は目を細めて気持ちよさそうにしてくれた。

その様子にクルトは大仰に肩を竦め、

「信用がありませんね？」

「まだ会って1時間も経ってない奴を全面的に信頼するのは無理があると思うが」

「そこは私の顔に免じて信用してくれませんか？」

「……すまん、胡散臭い」

「ド直球ですね、貴方」

本当に申し訳なさそうにそっぽを向くラオ。

数日見てきたが、やはり嘘はつけない性格の様だ。

「それで店を貸し切ったは良いけど何を話すつもりなんだ？」

「あ、そうそう。私達もさっき話し合ったけど結局解らなかったし」

小さなカップを手にお茶を飲むランが眉尻を下げつつ漏らす。

「そういう事、思い切りバラして良いんですの……？」

「あっ」

「ランエ……」

どうやらこのコンビはとことん嘘がつけない性格らしい。

「いえ、何、簡単な事ですよ。少し真面目な話でしたもので」

真面目な話する為に貸し切りとは、流石MM元老院議員は格が違った。

「さて。私の目的はただ1つ。お姫様……いえ、アスカ君でしたね」
「ん、私？」

はて。何故彼が私を求めるのだろうか。

原作では特にロリコンの気を感じさせる描写は無かった筈だが。

「おい、アスカに何をするつもりだ？」

「そんなに怖い顔をしないで下さい。別に何もする気はないですよ」

ただ、と彼は前置きをした上で人差し指を立て、

「彼女、身寄りはあるのですか？」

「……お前、やっぱりアスカの事知ってるのか？」

「まあ、私も話で聞いただけです」

微笑みながら放たれたクルトの言葉にラオの眼光が鋭くなる。

え？何故いきなりこの様な剣呑な雰囲気になるのですか。

というか話して何ですか。

会った事は無い筈だし、もしかや明日菜と勘違いしたりしているの

だろうか？

彼女の事ならタカミチとかを経由して話が伝わっていたりしそうだし。

「じゃあ、アスカの探してた知り合いってこの人なの？」

「……知り合いでは、ない。でも、探してたのは、この人」

「えっと、どゆこと？」

「お願いしたい事が、あった」

「お願いしたい事？」

「ん」

ランの疑問に対して首肯。

「後で、話す。まずは、クルトさんの、話を聞こ？」

「おや………すみませんね。気を使わせてしまった様で構わない」

一息ついて、目の前に置かれたミルクティーを飲む。

あ。結構熱い……。

「どうぞ」

「では、単刀直入に……」

彼は両肘をテーブルに着き、顔の前で両手を組みながら微笑む。瞬間、唐突に嫌な予感が脳裏を過ぎる。

いかん、これは間違いなく回答に困る質問が来るといっ予感だ。そして、その予想は正しく間違ってはいなかった。

「アスカ君。貴女、私の義娘になりませんか？」

相変わらずの笑顔。

彼は、さらりと爆弾発言を言っただけだ。

Side：ラオ・バイロン

アスカを義娘にしたいと目の前の男は言った。

初めて会った時から浮かべている笑顔が妙に胡散臭い男だ。だが強い。

それだけは身のこなしと気配から察する事が出来た。

恐らく俺とランが束になっても勝てない程、実力差があるだろう。だが、退く訳にはいかない。

こちらアスカを守ると数時間前に決意したばかりなのだから。

「待て。どうして唐突にそついう事になる」

腕を組みながら、問う。

すると彼はコチラの疑問を歓迎する様に微笑した。

「何。彼女が私の知り合いに似ていたものでして」

「そもそも何故アイツに身寄りがないのを知っていた？」

「フフフ。知り合いから聞いたのですよ」

「胡散臭え……」

俺の第六感が訴えている。

この男は信用出来ない、と。

しかもこの男、さっきからどうもアスカ自身を見ていない気がする

る。

まるでアスカを通して、誰か別の奴を見ている様な感覚だ。恐らくそれが彼の言う知り合いなのだろう。

それも加えて、気に食わん。

「で、その知り合いつていうのはどこに居るんだ？」

「さて、現在は現実世界でしたか……少なくとも魔法世界には居ないでしょうね」

一瞬だが、クルトの表情が曇る。

「まあ、色々ありましたね」

初めて素の表情を曝け出す様に、彼は苦笑する。

だがその表情の変化は一瞬だった。

彼は表情を真剣なものへ変え、俺を一度見てからアスカに視線をやる。

「さて、貴方との問答はともかく。アスカ君はどうですか？」

「魅力的な、提案」

「アスカ!？」

俺とランの声が被る。

まさかこの得体の知れない男についていくつもりか。せめてもう少し情報を集めてからでも遅くない筈だ。

故に俺とランはアスカの早計な行動を止めようと

「だが断る」

して、そのまますっ転んでテーブルに頭を打ち付けた。

転生者アスカ

うわぁ痛そう。

見事にすっ転んだラオとラン。

顔を打ち付けていた様だが大丈夫だろうか。

「こ、断るとは？魅力的と言ってくれたと思ったのですが？」

「魅力的。だけど、私、やる事がある」

クルトの戸惑いを含んだ声にまっすぐ見つめながら言葉を返す。

「やる事とは何ですか？」

ラオの向かい側に座るフィオネが問いかけて来る。
表情を真剣そのもの。

他の面々とは違って戸惑い等もない様子だった。

「まず、これから話す事、信じて貰いたい」

正直に話して、信じて貰えるかは解らないが、それしか出来はしない。

言葉の真偽を証明出来るもの等ないのだから。
態度と後は、

……この容姿に免じて、信じてくれる事を信じて！

『儂の巧みな采配が功を奏した様じゃな！』

そうですね。

だがロリにした事は許されざるよ。

『あ、案外お主もねちっこいのう……!?!?』

まあ、冗談はさておき。

コチラへと視線を送る皆を見返す。

皆一様に疑いの色等、微塵も存在しない表情を向けていた。

「俺はアスカの言う事なら信じるぜ」

「私もだよー!」

「わたくしも信じますわ」

「では、私もです。先程から術式に何の反応もありませんしね」

ちょっと待って下さい。

その眼鏡、一体何時の間に何を仕掛けてたんですか。

いや、今はその術式とやらに感謝すべきか。

多少なりとも信頼を得る事が出来た様だし。

ならば、とフィオネと目を合わせて口を開く。

「フィオネさん、ウェールズ、知ってる?」

まずは確認。

彼女が”原作を知っているなら”、ここで何らかの反応を返してくれる筈だ。

「ええ、知っています。イギリスを構成する国の1つだと認識しておりますわ」

「そこで、これから、何が起こるかは?」

「……恥ずかしながら、わたくしに”その知識”はありませんわ」

返答にコチラが固まると、彼女は眉尻を下げた表情を見せる。
まさかとは思ったが、本当に彼女は原作の知識を持っていない様
だ。

「ウェールズ、ですか。嫌な予感がしますが、何が起きるんですか
？」

「その前に、人払い」

座ったまま腰と視線を動かし真後ろを見る。

開け放たれた扉の向こう側には結構な人数の人だけが出てい
た。

どうやら有名人がカフェを貸し切ったという事実が野次馬を呼ん
だらしい。

「では」

クルトが懐に手を入れ、1枚の符を取り出す。
瞬間、符が光の粒となり、空間に溶け込んだ。

「これで周囲へ音が漏れることはありません。安心して下さい」
「ん」

一瞬で防音結界を張ったのか。
とんでもなく手際の良い男である。

「ありがとう」

「いえいえ。それでは話の続きをどうぞ」

「じゃあ、続ける」

一息。

「計画実行は、冬。冬の、何時起こるのかは、解らない。雪が降っていた、筈」

「計画……？」

いつの間にか復活したラオが訝しげな表情を向ける。
椅子に座ったまま姿勢を直し、続けて皆へ視線を送った。
彼らが自分を見ている事に頷きを1つ。

「ウエールズの、山奥。そこにある村が、狙われてる」

「ウエールズ……山奥？」

クルトから上がる疑問の声。

表情を見る限り、周囲の皆もクルトと同様の感情を抱いている様だ。

一瞬の沈黙。

しかし、その間は長く続かなかった。

顎に手を当て、考え込んでいたクルトが顔を上げたのだ。

それも、目を見開いた驚愕の表情を浮かべてだ。

「まさか　っ!？」

「ん」

彼の叫びにも似た疑問を首肯する。

MM元老院議員の彼ならば知っていてもおかしくはあるまい。

あの山奥にはどのような存在が居るのか。

「そう」

目を細め、言葉が続ける。

「狙いは、ネギ・スプリングフィールド」

「スプリングフィールド、だと」

「まさか英雄の？」

ラオとランが若干の焦りを帯びながら、驚の感情を露にする。それに対してフィオネとクルトは冷静さを取り戻していた。フィオネはクルトを一瞥してから、コチラを見て、

「そして、アリス・スプリングフィールドも、ですわね？」

え。誰ですかその人。

第6話 話をしよう！眼鏡と私と事情説明！（後書き）

フィオネについては次回と言ったな。
あれは嘘だ。

じ、次回こそ！次回こそしますので！

まずはここまで見てくださった方々に最大限の感謝を。
感想などがありましたら是非お願い致します！

今回はなぜか妙に難産でありました……。
若干失速していますが、次回からは話の流れもだいぶ速くなる予定です。

ここでまたもや新キャラクターの名前。

基本的にこの話に登場するオリジナルキャラクターは転生者です。
各々、原作知識の有り無し、という差異はありますが……！

第7話 クルト・ゲーデルの思案〜MM元老院の陰謀添え〜

Side：クルト・ゲーデル

時刻は夜。

窓から見えるのは黒く染められたキャンパスだ。

やや視線を落とせば、そこに連なり聳え立つの灰色の塔の群。窓際に立てば、眼下に都市の景色が広がっていた。

現在地はメガロメセンブリアの中央近くにある高層ビルの一角だ。その上層に自分達が居た。

振り向けば、奥行のある部屋がある。

中央には部屋と同様に奥行のあるテーブルが置かれており、

「むぐ」

「うまうまー！」

「うひよお、こりやうめえ！」

「おかわりはいっぱいありますからね」

白のテーブルクロス上には様々な料理が並べられている。

それらを勢いよく手に取り、口へ運ぶのは3人の男女だ。

勢いよく食事をかき込むのは大小2つの人影。

ラオ、ランのコンビだ。

そして、背丈が小さく静かに食事を進めるのは、

……アスカ君、ですか。

観察する為に目を細めながら、顎に手を当てる。

アスカという少女は、実に子どもらしくない子どもだった。

発言内容自体は突拍子もない。

が、淡々とそれを述べる様子を見る限りでは、

……嘘を言っている様にも見えぬ、術式に反応も無し、ですか。

それに一緒に居るラオ、ランからの信頼されようも異常だ。

どう考えても齡1桁にしか見えぬ子どもに対する態度ではない。

……だが。

彼女にはそれを成してしまう独特な雰囲気がある。

それは、カリスマと呼ぶべきか。

私までも術式の内容の有無に関わらず、彼女の言葉に耳を傾けてしまふ。

それは、

……まるで王の演説の様でしたね……。

言葉を聞く者を否応なしに納得させてしまふ風格。

彼女の平淡な、しかし堂々とした言動にその片鱗を感じる事が出来る。

……流石はあの”アスナ姫”の写し身と言ったところですか。

王族の血は確かに目の前の少女に投影されていた様だ。

……ただの”クローン”とは思えませんね。

そう。

彼女は”クローン”なのだ。

実は私は眠った状態の彼女とは何度か出会った事がある。

更に彼女が眠りについていた研究所の職員の何人かは知り合いでもある。

故に知っている。

本来なら、”彼女は目覚める事なく一生を終える筈だった”という事を。

だが、その予測は軽々と覆された。

数日前に彼女が目覚めたという情報が届いたのだ。

それを聞いた時、少々狼狽してしまったのは記憶に新しい。

だが、驚くのも仕方ない事だろう。

目覚める筈がないと断言されていた者が目覚めたのだ。

それは死人が生き返ったと聞かされたに等しい。

しかも目覚めたその日に脱走したという。

それを聞いた時、かなり狼狽してしまったのは記憶に新しい。

……更にいきなり目の前に、ですか。

トドメとばかりに、いきなり現れた時は本当に心臓が止まるかと思っただ。

驚愕の連続による心労を癒す為、フィオネが奨めるカフェへ来たというのに、

……まさか心労の原因と遭遇するとは。

ここまで来ると運命的な何かすら感じる。

そこでふと思い出したのが、彼女には身寄りがないという事だ。

もしかしたらこの出会いは運命だったのかもしれない。

というわけで、養子にならないか？と誘ったが一蹴された。

運命とは実に儂いものである。

……べ、別にタカミチが羨ましいとか思ってますからね！

まあ、何はともあれ、彼女とこうして出会えたのは行幸だ。情報によれば彼女はアスナ姫の記憶を持っているという。

もし本当ならば、アスナ姫の全てを受け継いでいる可能性もある。"世界を破滅へと導きかねない"能力　魔法無効化能力も、だ。その為、MM元老院には内密で必死に探し回っていたというのに、

……自らメガロメセンブリアへやってくるとは行動力に溢れていますねえ。

しみじみと遠い目をしながら思う。

彼女曰く、私に伝えたい事があったから来たらしい。

何事かと聞いた直後は内心首を傾げたものだが、その理由を聞いて納得した。

『スプリングフィールド家の子ども達が狙われている』

それを聞いた時、私は思わず顔を顰めた。

誰がとは聞くまでもなかった。

候補に挙がるのはMM元老院の一部勢力、それと『完全なる世界の残党だ。』

心当たりは多々あった。

完全なる世界の残党については理由を述べる必要すらない。

自分達の組織を滅ぼしたパーティの中心人物の息子達だ。

恨まない筈がない。

だが、彼らは今その殆どが私とタカミチの手により狩られ、沈黙している筈。

そして、MM元老院の一部勢力だが……。

こちらは前々からMM元老院内でも、影で話に上がっていた事だ。曰く、災厄の女王の子孫を生かしておく訳にはいかない。

曰く、息子はまだ良い。英雄の息子として立派な魔法使いになれるだろう。

曰く、ただし娘、テメーは駄目だ。

最後の言葉を放った輩はその場で粛清しておいた。

勿論、笑顔でだ。

アリカ様そっくりの彼女に手を出すとか本気と書いてマジで許されざる行為である。

アリカ様の娘　　アリス・スプリングフィールドとは誠に遺憾ながら面識はない。

しかし、会わずともこの胸は彼女ともう一人のアリカ様の息子への想いに溢れていた。

十年程前の記憶を思い返す。

脳裏に浮かぶのは、処刑直前のアリカ様の痛々しい姿。

私はアリカ様を救えなかった。

その後悔は今でも心の隅に張り付く様にして残っている。

故にその子ども達に驚異が迫っているならば、力にならねばなるまい。

今度こそ、後悔をしない為にも。

ちなみにアリスを知っているのは、彼女の写真を持っているからだ。

毎日眺め、心を癒すのに使用している。

何故かフィオネに毎度殺気の籠った目で見られるが。

会いに行こうとするとフィオネに全力で妨害されるし。

コチラとしてはそろそろ限界でもあったのだ。

故にその内無理矢理にでも暇を確保し、赴いて拝顔する予定でいたというのに、

……アリカ様の麗しさを解らぬ輩共め……！

嗚呼、しかしアリカ様は何処へ行ってしまわれたのだろうか。

まさかナギと共に子ども達を置いて行方不明になるとは。いや、『完全なる世界』との戦いの中、行方不明になったとは聞いている。

だが彼女達がそう簡単に死ぬとは信じられない。ハッ、もしや育児放棄してナギと怠惰で淫靡な毎日をどこかで！？おのれナギ、我々のアリカ様をたぶらかすとは許されざる行い。フフフ、こうなれば子ども達と出会った暁にはある事ない事を吹き込んでくれる。

……おつと思考の方向がズレましたね。

思考の中で話が逸れるというのもどうだろうと思うが、それは置いておく。

兎に角、アスカの言葉は私の懸念を揺らすには十分な真実味を帯びていた。

戯言とは思えぬ雰囲気。

そして、前提としてあるMM元老院の一部勢力の不穏な動き。彼女を信じてみる価値はある。

私は即座にフィオネに一部勢力のメンバーの調査を依頼。

日が変わる頃には調査結果が出る筈だ。

だがカフェで話したのは昼頃。

まだ日が変わるまでは時間がある。

だから、

「待つ間、折角ですし夕食でも一緒にどうですか？とは言いませんが……」

「おおこの飯異常に美味えぞ、アスカ！？」

「コッチのもなかなかだよー！？ねえ、アスカも食べてみる？」

「ん……」

もつやりたい放題である。

ここは自宅の1つである高層ビルにある食事用の一室。天上から吊るされるのは煌びやかに装飾されたシャンデリア。それはテーブル上の食事を照らし、優雅さを演出する。筈だったのだが。

……どれだけ食べるんですか、この人達は……。

今ではそのシャンデリアに挑まんとばかりの勢いで皿が積み重ねられている。

思わず額に手を当てて背後を見る。

肩まで茶の髪を伸ばしたメイドの1人が部屋の隅で引き攣った笑みを浮かべていた。

流石にここまで豪快な客は彼女も相手にした事がなかったらしい。ラオ・バイロンにラン・ファオ。

彼らの名は高級店に連れて行ってはいけないリストに載せておくとしよう。

「しかし、悪いな。こんな美味いもん食わせて貰ってよ」

「でしたら少しは遠慮してくれませんかね？」

「うめえな、この良く解らんパリパリしたやつ」

「無視ですか。無視なんですか」

ラオはそっぽ向いてムシャムシャと食事を再開した。

コッチヲミロオ。

「でもこんなんびりしてていいのかな、英雄の子ども達が狙われ
てるんだよね」

代わりとばかりにランが食事の手を止め、コチラを見て問う。

その問いを1度手で制すとメイド達を部屋の外へ下がらせる。
関係者以外の退出を確認すると、改めてランへ視線を向け、

「ええ、そうですね。しかも悪魔の軍勢を使って、等という大胆な方法で」

「早く会いに行つて護衛した方がいいんじゃないかな？」

彼女は首を傾げながら問いを続ける。

意見としては至極真つ当なものだ。

「既に必要最低限の護衛を密かに向かわせています」

「……どれくらい？」

「私の手勢の中では選りすぐりの精鋭を3人程」

「少なっ!？」

失礼な。

これでも現状で即座に動員出来る人員としては最大。

ゲートの確保、対悪魔用の武具の調達にも最速の働きをもって対応。

かなり頑張つた方なのだ。

「それに余り多くの手勢を動かしては相手側に計画を先延ばしにされる可能性がある」

「?先延ばしにされるんなら、いいじゃないかな？」

「先延ばしにするという事は密かに狙われ続けるという事ですよ、お嬢さん」

「あー……もしかして、囮作戦？」

「非常に心苦しいですが、その通りですね」

思わず顔を顰めながら答える。

そう、MM元老院内の危険因子を潰すなら今なのだ。
英雄の子ども達を害するというならば、彼らを排除する名分も立つ。

「フィオネ君には怪しい動きをしている議員が居ないかを調査して貰っています」

「成程。悪魔召還の儀式と違って結構大仰な準備が必要だから」

「ええ、資金や人員の動きさえ見れば、不可解な点が必ず見つかる筈です」

「時間的な猶予は？」

「雪が降る時期という彼女の言を信じるならば、まだ余裕があるかと」

「ふむふむ。成程成程……じゃあ、今から炙り出し＋護衛の増員をしていけば」

「襲撃を事前に潰す事が出来るという訳です」

「流石議員さん、黒いねえ……」

「フツツ、それ程でもありませんよ」

「アハハハ」

「フフフフ」

この妖精、一見陽気で何も考えていない様に見えるが、どうやら相当頭がキレる。

ふむ。この騒ぎが収まったらスカウトしてみますか。

相棒のラオもかなりの手練の様だし、無駄にはならないだろう。

「……おや？アスカ君、何故震えてるのですか」

ランと私が笑いあっていると何故か視界の端で小刻みに震えるアスカの姿。

はて、なにかしただろうか、と首を傾げる。

原因が不明なのはランも同様の様で、首を傾げていた。再び、アスカを見る。

彼女は相変わらずの無表情のまま、しかし、しっかりと口を動かして、

「なにか、怖い」

「失礼します！」

アスカの眩きと同時に扉が勢い良く開かれる。

驚きの感情と共に音の発生源を見れば、そこには荒い息を吐き出す、

「フィオネ君？」

「お食事中、申し訳ありません。ですが、緊急事態です」

白い肌に珠の様な汗を伝わせながらも、フィオネは歩を進めてくる。

その表情は眉を立て、表情筋を強張らせたものだ。

彼女の状態からして、並みではない問題が発生した事が把握出来る。

嫌な予感がする。

まさかアスカが先程怖い、と言ったのはこの予感に関係が？

背筋が震えるが、止まっている暇はなさそうだ。

「人払いはしてあります。どうぞ、続けてください」

「では」

彼女はテーブルの空いた場所に紙の束を置き、

「ウェールズの山中にある村、その襲撃まで残り、2時間です」

彼女は息を整える為に胸に手を置き、深呼吸。
再度表情を引き締め、全員を見渡した後、

「先程ゲートを使って召喚魔法に特化した刺客達が旧世界に向かったとの事ですわ」

「何故、その様な事に。まさかコチラの動きに気づいて？」

「いえ、気づかれてはいなかったみたいですね。ただそれとは別の」

「そこから先は原因である僕が話そう、フィオネ君」
「む？」

入り口から響く、男の声。

何時の間に入ってきたのか、彼はそこに居た。

灰色のスーツを無駄なく着込み、これまた無駄のない動作で歩く男。

白い短髪の下ではアンダーリムの黒縁眼鏡がキラリと輝いていた。
その男は、

「タカミチ……？」

アスカの口から呟く様にして、彼の名が漏れ出した。

第7話 クルト・ゲーデルの思案〜MM元老院の陰謀添え〜（後書き）

今回も短めです。

ここまで見てくださった方々に最大限の感謝を。

次は休み中に投稿予定です！

一気に話を動かす為、急展開・超展開だらけですが、
お許しください、クルト議員！

次回か、次々回辺りになりそうですが、早くネギを出したいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9696y/>

ネギまでクロニクル！～いざいけ！平穏なる世界！～

2011年12月24日10時48分発行